トライアングル・スクランブル

楽生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
トライアングル・スクランブル

【Ｎコード】
Ｎ４８８３Ｘ

【作者名】
楽生

【あらすじ】
憧れの高校に入学できた１５歳の倉沢桃乃。
だが、向かいに住む幼馴染、西脇冬馬も同じ高校なのが少々憂鬱だった。
“　桃太郎　”　とからかわれるのが嫌で冬馬を避ける桃乃だったが、いつもこのぶっきらぼうな強引な幼馴染は当然のような顔で隣に現れて――。
冬馬のひたすら一途な想いに桃乃が次第に心を動かされていく様子

を中心に、二人の周囲で様々な人間関係と恋愛が交錯してゆく、青春群像系・恋愛物語。

人物紹介

◇倉沢　桃乃◇
カノンに通う高校一年生。
性格は幼い頃引っ込み思案だったせいか、今もどちらかというとおとなしめ。
向かいに住む冬馬とは幼稚園時代からの幼馴染。黒髪と大きな黒い瞳の少女。

◆西脇　冬馬◆
カノンに通う高校一年生。
性格はどちらかというと単純で熱血系。運動神経に非常に優れており、
バスケが得意。身長178センチ。スッキリとした顔立ちの少年。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

≪カノンの生徒≫

◇南　沙羅◇
桃乃のクラスメイト。
父が日本人で母がイギリス人のハーフ。性格は落ち込むことを知らない元気少女。

◆柴門　要◆

冬馬のクラスメイト。
表面上はクールを装っているが実は寂しがり屋な性格。少々ナルシストな面もある。

◇笹目　梨絵◇
桃乃のクラスメイト。
なぜか入学してから一度も体育に出席せず、その為に学審会にかけられそうになる。

≪カノンの教師≫

◇柳川　緑◇
カノンで一年英語を担当するグラマラスな女教師で冬馬や要のクラス担任。

◆矢貫　誠吾◆
カノンで一年体育を担当する教師。桃乃や沙羅のクラス担任。

◆黒岩　秀樹◆
カノン慈愛学園理事長。規則第一主義者。

≪家族・その他≫

◆西脇　裕人◆
冬馬と5歳違いの兄で大学生。
長身に甘いマスク、人当たりの良さで幅広い層の女性達に好かれる。
弟思いな所があり、冬馬の恋が成就するように立ち回ることがある。

◇倉沢　葉月◇
桃乃の4歳下の妹で現在小学6年生。
ませているため恋愛関係の空気を読むのが早い。向かいに住む裕人が大好きで
夢は裕人のお嫁さんになること。

◆倉沢　雅治◆
桃乃の父親。娘二人の父親のせいか少々心配性。

◇倉沢　千鶴◇
桃乃の母親。おっとりとした優しい性格。

◆西脇　啓一郎◆
冬馬の父親。真面目で堅物。

◇西脇　麻知子◇
冬馬の母親。ボーイッシュ&アクティブな性格。

※この作品は自サイトにも掲載中です

プロローグ

緑に囲まれた小高い丘の一角に建つ『カノン慈愛学園』。

その丘の下に小さな港を一望できる抜群のロケーションと、まるでヨーロッパの建物のようなモダンな外観で人気の私立高校だ。学生には「カノン」という通り名で親しまれている。

カノンの意味は『規範』。

この高校はその学園名がすべての特徴を物語っており、校則がかなり厳しいことで有名な高校だ。

共学高校ではあるが、クラスは男子と女子に完全に分けられており、尚且つ校舎も広い敷地内に大きく離されてそれぞれ建てられている。

しかもグラウンドまでも男子専用グラウンドと女子専用グラウンドが用意されていて、同じ学園内にいても昼食時以外はお互い異性の姿を見かけることはほとんどなかった。

クラスは男女共に一学年六クラス、各クラス二十名足らずの小人数制。

それに加え、徹底しているこの学園の規律の厳しさが、我が子の学力向上と異性関係を心配する父兄達の絶大なる支持を集め続けている大きな要因の一つでもあった。

この学園は慈愛、博愛をモットーとするスクールカラーが売りの一つでもある。

そのため、入学前の個人審査で本人や親がボランティア活動などを行っているかを学園側は必ず問う。

だがそれまで特にそれらの活動に携わる経験が無かったとしても、学力と素行、それに家庭環境に特に大きな問題が無ければ学園への入学は許可されることが多い。

――が、是が非でも我が子をカノンへ入れたいと真剣に願う親の中には面接前に熱心にボランティア活動に従事し、その活動の詳細を面接で得々と語る者まで現れるらしい。

この学園が保護者にとって魅力の高い高校だということがそこからも容易に伺うことができた。

昨日は新入生の親も来校しての入学式が厳粛に執り行われ、新入生にとっては今日が初めての登校日だ。桜の蕾が少しずつ芽吹き始めるこの季節、丘の上に建つ白亜の高校に向かって歩く少女が一人。

少女の名は倉沢桃乃（くらさわもも）。

肩を少し越したセミロングの濡れるような黒髪と、同じように大きな黒い瞳が特徴の、細身で比較的おとなしい性格の少女だ。

学力は現時点では中の上。

上位ベストランクには入っていないが下位ランクで目立つこともない、ごく普通の学力だ。

しかしそれはあくまでカノンの中のランクであって、カノンの偏差値は他の近隣の私立高校よりも高水準のため、桃乃の学力は決して低いものでは無かった。

憧れのカノンの制服を身に着けられた嬉しさで、桃乃はウキウキしながら歩いていた。長い黒髪がその度に大きく揺れる。

カノン女子の制服は有名なデザイナーブランドの一つで、群青色のジャケットにネクタイ、そして膝上十センチのブラウンチェックタイプのスクールスカートだ。

男子も上のジャケットとネクタイは女子と同じ物で、ボトムは濃いグレーで一番細いスケータータイプ。靴は男女とも黒のローファーだ。
ここの制服で特に桃乃の一番のお気に入りは、今自分の胸元で鈍く光っている青いネクタイだ。
深い海のような鮮やかな色のジャケットの胸元を引き締めるネクタイは、ブルーにほんの少しの光沢が入っていて太陽光の当たる角度によって鈍く輝く。

「あ、あの子カノンの生徒よ」

今朝の電車内に差し込む光でそのネクタイがわずかに光り、それに気付いた他高の生徒がヒソヒソと後ろで噂していたのがたまらなく快感だった。
嬉しさのあまり今にもスキップしそうな歩き方をしていた桃乃の小さな頭に、突然、ポンッと大きな何かが乗せられる。
「きゃっ！？」
頭頂部に感じるゴツゴツした感触。誰かの大きな掌のようだ。
驚いた桃乃は身を翻して後ろを振り返る。

「……なぁ桃太郎、お前なに朝からそんなに浮かれているワケ？」

長身で肩幅のある男子が、うっすらと両目にかかる長い前髪を空いている片手で邪魔そうにかきあげ、桃乃を見下ろしている。
桃乃は一瞬息を呑んだ後、その少年に向かって怒りをぶつけた。
「とっ冬馬……！　もう、いきなりなにするのよ！　ビックリしたじゃない！」

桃乃に「冬馬」と呼ばれた少年、西脇冬馬（にしわきとうま）は桃乃の頭を軽く叩いた大きな右手を広げながらへへッと屈託の無い笑顔を見せた。

「だってよ、お前今にも踊り出しそうな歩き方してたぜ？　公衆の面前で恥かかないように俺が止めてやったんじゃねぇか。感謝してほしいね」

「か、感謝……？」

いきなり驚かせて謝るどころか感謝しろ、と言い出す冬馬に桃乃は唖然とする。

「なぁそれよりよ、なんでお前今朝さっさと一人で行っちまうんだよ？　一緒に行こうと思って朝お前んちに寄ったんだぜ？」

「なっなんで私が冬馬と一緒に登校しなきゃいけないのよ？」

「なんでって……同じガッコじゃねぇか。家だって真ん前だしよ」

桃乃の家と冬馬の家は昔からお向かい同士のご近所さんで二人は幼馴染の間柄だ。

「あっ、わーかったっ！　俺、分かっちゃったよ！」

身長百七十八センチの冬馬は急に相好を崩すと、すかさず長身を折り曲げて二十センチ下にいる桃乃の顔をグイッと覗き込む。

その拍子に冬馬の前髪が自分の前髪に微かに触れ、反射的に桃乃は半歩身を引いた。

「お前さー、嬉しさのあまり恥ずかしいんだろ？　この俺と歩くのがさ」

「バッ、バッカじゃないの！？」

桃乃はそう言い放つとプイと顔を背け、さっさと先に歩き出した。

普段はおとなしい桃乃だが、幼馴染の冬馬の前では最近よくこんな態度になってしまう。

後方から冬馬の大声が響く。

「おーい桃太郎〜。図星だからってそんなにむくれるなよ〜！」
桃乃はなんとかこの幼馴染を振り切ろうと足を早めた。
が、今の二人の歩幅は約倍ほども違うので、すぐにあっさりと追いついてきた冬馬は桃乃の横に並ぶとさりげなく自分のペースを落す。
しかし歩幅を合わせてもらっていることに気付いていない桃乃は、右斜め上の冬馬の顔を見上げて一旦足を止め、再び強い口調で切り出す。
「冬馬っ、いいかげんに私のこと桃太郎って呼ぶのは止めて！」
「は？　だって桃太郎じゃん？」
「だから止めてってば！」

――　幼い時は桃乃のことを「ももちゃん」と呼んでいた冬馬だが、成長するにつれて小学校高学年になってからは「桃乃」、そして中学二年以降はなぜか「桃太郎」と呼ぶようになっていたのだ。

「ま、そんな細かいことにイチイチこだわるなって。どーせどっちも大して変わんねぇじゃん？」
冬馬は桃乃から視線を外し、前方を見たままでハハハッと快活な笑い声を上げた。
そんな冬馬を横目にまた歩き出した桃乃は、（昔はこんな奴じゃなかったのに……）とイライラしてくる気持ちを心の中だけでなんとか抑えることに腐心する。

幼い頃は桃乃より背が低く、「モモちゃん、大きくなったらボクのお嫁さんになってよね」なんて可愛らしいことを言っていた冬馬だったのに、気が付けばいつのまにか背もこんなに大きく追い抜かれて桃乃はさっきみたいに「桃太郎」と呼ばれ、いつもからかわれ

るようになってしまっていたのだ。

カノンに近づくにつれ通学する生徒の数も少しずつ増え出し、桃乃はできるだけ冬馬と並ばないように歩こうと必死に努力を続けた。

だが元凶の冬馬が「なぁなぁ桃太郎。この間のさ……」などとあれこれと話し掛けてくるため、結局その努力はすべて無駄に終わってしまっていた。

よって今の桃乃に残されたせめてもの抵抗は、冬馬の呼びかけに一切返事をせず、二度と右側に顔を向けないで競歩のようなスピードでスタスタと歩くことだけだった。

ようやくカノンの正門が見えてくる。門柱横に一人の若い女性が立っていた。

グラマラスな体を黒いスーツで包んだ魅惑的な容姿のその女性は、桃乃達の方にゆっくりと視線を向ける。

「おはよう」

年は二十代半ば辺りだろうか。女性の発した声はよく通るソプラノ声だ。

「お、おはようございます」

「おはよっす」

初めて会う女性だったが、たぶんこのカノンの教師なのだろう。その女性は開いていた名簿を一度閉じ、意味ありげに呟く。

「へぇ……新入生が初日からカップルで登校するの、久しぶりに見たわ」

毛先を柔らかくカールさせたロングヘアに唇に綺麗にひかれたパールピンクのリップが艶かしい。

「わっ、私たちそんな関係じゃありませんっ！」

桃乃は赤くなって慌てて否定をした。一方、冬馬は否定も肯定もせず、黙って突っ立っている。
「あなた達新入生ね？　名前教えてもらえるかしら？」
「は、はい。倉沢桃乃です」
「……西脇冬馬ッス」
「倉沢さんに西脇くんね……」

その女性は右手に持っていた「新入生名簿」と書かれた名簿を再び開き、パラパラとページをめくって中に二人の名前が記載されていることを確認する。

「ね、どっちでもいいけど仲良く登校はここまでよ。ウチは男女交際の規律が厳しいの知ってるわよね？　この先、女の子は左、男の子は右の校舎に行ってね」
グロスのせいで濡れたような唇の女性はそう言うとそれぞれ進む方向を指差す。
「分かりました」
桃乃はそう返事をすると冬馬の方を一切見ないまま左の校舎の方へ歩いて行く。
正門前でまだその桃乃の後ろ姿を見送っていた冬馬に女性がフフッと笑いかけた。
「ねぇねぇ君、もしかして振られちゃったの？」
感情がすぐ表情に出る性格の冬馬は途端にムッとした表情を浮かべる。
「……そんなんじゃないッスよ」
そして不機嫌な顔のまま、サッと身を翻すと右側の校舎に走り去っていった。

カノンで英語の教科を担当する女性教師、柳川緑（やなかわみどり）は好奇心の混じ

った目で冬馬の後姿をしばらく目で追った。そして唇の右端を小さく上げて笑うと、新入生名簿を再び開く。
白く細い指が名簿の上をなめらかに滑りはじめた。
やがてその指は静かにその動きを止めたが、その指がさした先は冬馬の履歴表が載っているページだった。

プロローグ　―　2　―

（まったく冬馬ったら……！）

カノン登校初日の浮かれた気分も、あの憎たらしい幼馴染のせいで一気に台無しになってしまった。
イライラした気分を抱えたまま左側の白い校舎に入る。
玄関を抜けたすぐの場所に大きなホワイトボードが設置してあるのが見えた。

ボードに大きな紙が貼られてある。
その前でキャーキャーと騒ぐ女子生徒達の大群。
どうやらクラス分けの名簿が貼られているらしい。
目の前で揺れ動き続ける大勢の人の波は一向に静まる気配が無く、身長百五十八センチの桃乃はなかなかその名簿を見ることが出来なかった。

「Ｗａｏ　！　すっごい人だかりね！」

頭頂部上空から大きな声が振ってきた。
桃乃がその声の方向をチラッと見上げると、ツインテールの亜麻色の髪がまず最初に目に飛び込んできた。
背が高く、少し青みがかった瞳に抜けるような白い肌、そして微かなそばかす顔の少女は振り返った桃乃と目があうとにこやかに笑いかけてくる。
「Ｈｉ！　あなたのクラスは？」

いきなり話し掛けてきたその人懐っこそうな少女は桃乃に向かってウィンクをする。
「えっ、まだ分からないの。……よく見えなくて」
「じゃ、あたしが見てあげる！　あなた名前は？」
「倉沢桃乃だけど……」
「ＯＫ！　ちょっと待っててね！」
桃乃より頭一つ分以上は優にあるその高身長を活かし、ツインテールの少女はボードを上から順に丁寧に目で追っていった。やがて少女の口から感嘆の声が上がる。
「モモ！　あなた二組よ。あたしと一緒！」
いきなり自分の名前を略称で呼ばれて桃乃は少々戸惑ったが、同時にこの底抜けに明るそうな少女にぐいぐいと惹かれだしていた。
「ねっ、一緒に教室に行こうよ！」
少女が桃乃を誘う。桃乃は慌てて頷いた。
ボード前の喧騒から逃れると二人は並んで歩き出す。
桃乃が訊くよりも早く、その少女は自己紹介をした。
「あたし南沙羅（みなみさら）。沙羅って呼んでね！　桃乃ってちょっと呼びづらいからモモって呼んでいい？」
「うん、いいよ。ね、沙羅さん、あなたって……」
「あ！」
そう叫ぶと急に沙羅は顔の前で大きく右手を何度も横に振り、桃乃の言葉を遮る。
「モモ！　だから“　さん”　はいらないってば！」
大振りのジャスチャーであまりにもキッパリと言われたので、桃乃は訊きたかった事を言う前にあらためて沙羅の名前をもう一度呼び直した。
「さ、沙羅」
「なに？」
「あのね、あなたって、ハーフなの？」

一瞬の沈黙。

それまでニコニコしていた沙羅の表情が固まったように見えたので桃乃は慌てて謝った。

「ご、ごめんね。もしかして訊いちゃいけなかったかな……？」

「ううん、ぜーんぜん！」

沙羅は再び大きく笑顔を見せる。

「うん、ハーフだよっ。パパは日本人でママはイギリス人なんだ」

「やっぱり。あなた色がとっても白いものね」

桃乃も幼い頃から色白な方だったが、肌の白さでは沙羅の方が明らかに上だった。

「でもさーモモ、その白さのせいでホラ見て！」

と沙羅は自分の頬を指差す。

「こんな風にそばかすが目立っちゃうのよ。結構困ってるのよね～」

大袈裟に肩を竦めると沙羅は大きくため息をついた。

そのいかにも外国人的なオーバーリアクションがおかしくてつい桃乃はクスクスと笑ってしまった。

「モモ～、ここは笑うところじゃないよ？　女の子の美容の悩み話なのに～！」

そう言いながら沙羅は腕組みをすると頬を小さく膨らませ、わざと膨れた真似をする。

「ご、ごめんなさい。沙羅のその身振りがちょっとおかしかったの」

「あーなるほどね！　うちのママが普段から大振りのジェスチャーをよくするからついうつっちゃうの！」

膨れっ面を止めた沙羅は、組んでいた両腕を外して背中に回して快活に笑う。

登校当日にこんなに明るくて楽しい女の子と友達になれてなんて嬉しいな、と思いながら桃乃は沙羅と一緒に一年二組の教室に入る。

ついさっきまであんなにイライラしていた気持ちはすでに遠くに吹き飛んで桃乃の脳裏から完璧に消え去っていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

一方その頃、冬馬も自分が四組だということを確かめて教室に入った所だった。

教室内に一歩入ると男・男・男の光景。

例え教室内の壁は真っ白でも中学の時とはまったく違うこの男臭い空気までは変える事が出来ない。

一切の華が無いそのあまりのむさくるしさに冬馬はため息をついた。

「そこを行くのは『シラトの星』じゃないか？」

冬馬の背後からややからかい気味の声がかかる。「シラト」とは冬馬や桃乃が通っていた白杜（しらと）中学のことだ。

かかった声の方角に冬馬が目をやると、長髪ぎみでかなり細身の男が両足を机の上に上げてニヤニヤとこちらを見ていた。

「やっぱりシラトの星だ。西脇冬馬だろ？」

「……誰だお前」

腕組みをしながら薄ら笑いを浮かべて自分を見ている、この端正な顔のヤサ男が気に入らなくて冬馬はぶっきらぼうな返事をした。

「おいおい、出会い頭にそんなに睨むなよ。俺は柴門要（さいもんかなめ）。七海（ななみ）中だ」

「七海……」
七海中学は冬馬が白杜中学で所属していたバスケ部でよく対抗試合をしていた中学だ。
「白杜のバスケ部がこっちに来て練習試合をしてた時、よく見に行ってたんだ。お前、ここでもまたバスケやるのかよ？」
「あ？　別にお前には関係ないだろ」
「冷たいねぇ。これからは同じクラスメイトだぜ？　仲良くやろうや」
切れ長の目にかかり気味な前髪を掻きあげると要は挑戦的な眼で冬馬を見据え、もう一度ニヤッと笑う。
その時、廊下の奥から甲高い靴音が響いてきた。
靴音は四組の前でピタリと止まり、同時に教室の扉がガラッと開く。
そして再びハイヒールの音を高らかに響かせて一年四組の教室内に一人の女性が入ってきた。
教室内に入ってきたその女性が、今朝方、正門前に立っていた教師だったことに冬馬は気付く。
むさくるしいこの男ばかりの教室にいきなり匂い立つような色香をふりまく女性が入ってきたので教室内は一時騒然となった。
そんな男子生徒達のざわめく様子を肌で感じた緑は満足そうに微笑みながらカツカツと足音高く教壇に立つ。
「じゃあ皆とりあえず適当に座ってね。後で改めて席を決めるから」

そして緑は後ろの黒板に一旦体を向けると赤いチョークで「柳川緑」と書いた。
「ハイ、これが私の名前。柳川緑です。今日から私が君達の担任です。じゃあ一年間よろしくね」
緑がそう発言し終わった瞬間、教室の後ろの方から教壇に向かって声がかかる。

「先生は彼氏いるんですか？」

発言をしたのは要だ。

「彼氏？　今はいないわよ。一応募集中って所かしらね」

緑はあっさりとそう答え、そのノリのいい発言に即座に教室中が湧きかえる。

「先生ー！　俺と付き合ってー！」

「先生ー、美人ッ！」

「ミドリ、愛してる～！」

一年四組の男子生徒達はたちまち悪ふざけをはじめた。

「ちょっとちょっとー！」

リップと同じパールピンクの長いネイルがピンと立ち上がる。

「私、これでも結構面食いなんだからね。先生にも選ぶ権利あるわよ？」

「じゃ、俺はどうですか、先生？」

また要が口を開く。

「……そうね……」

と緑は呟き、一番後ろの席にでんと座っている要の前にまでゆっくりと歩いてきた。

黒のタイトミニからすらりと伸びる白い脚の動きに教室内の熱い視線が一斉に注がれる。

緑は要の横にまで来ると細い腰に手を当てて、その顔を上から遠慮無く眺めた。

「……ウン、悪くないかも。君、なかなかいい男じゃない」

「そりゃあどうも」

要は自分の容姿を誉められても眉ひとつ動かさずに礼を言った。自分の容姿には相当の自信を持っているようだ。

「でもね……」

と言いながら緑は腰の手を離し、机の上に乗せたままの要の両足をグイと掴みあげると自分の手前に引き寄せ、勢いよく放した。

「！？」
ダンッと大きな音と共に要の両足が床に着き、要の顔に一瞬驚きの色が走る。
「いい男はマナーもキチンとしてないとね。残念だけどあなたはまだ二流みたいね」
要が自分をからかっていることにとっくに気付いていた緑はそう切り返す。「二流」と言われた要の顔が一瞬険しくなった。
緑はそんな顔の要を見下ろすとフフッと満足そうに小さく笑い、そして教壇に戻りがてら、冬馬の横に来ると足を止めて急に身をかがめる。
「ね、君もなかなかイイ線いってるわよ？」
いきなり耳横で話し掛けられた冬馬は驚いて椅子の上で身を引いた。緑は冬馬にしか聞こえないぐらいの声で更に囁く。
「……彼女から私に乗りかえる、なんてどうかしら？」
「ハァ！？」
たじろぐ冬馬に緑はフフッと微笑み、教壇へと戻る。再び教壇に立った緑はもう完全に教師の顔に戻っていた。
「ハイ、じゃあまず出席を取ります。その後、クラス委員を決めますからね。私は愚図愚図するのが嫌いなの。さっさとやっちゃいましょう。じゃあ、安藤卓くん……」
緑の点呼の声が一年四組の教室内に響く。冬馬は今しがた耳横で緑から言われた台詞にまだ動揺していた。
（なんなんだ　あの先生は！？）
腕組みをした要が氷のような冷たい目つきで前方を見ている。
その視線の先は冬馬の背中だった。
だが自分の背中に要の冷たい視線が突き刺さっていることをこの

時の冬馬はまだ知らなかった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

その後、最初のホームルームを無事終えた緑はいつも通りヒールの音を高らかに鳴らしながら職員室へと戻る。

入学式後最初のホームルームなので戻ってきている教師はまだ一人しかいなかった。

緑は職員室に一番に戻ってきていたその教師とは視線を合わさないようにして自分の席につく。

すると緑の左隣の席のその教師が待ちかねていたように声をかけてきた。

「お疲れ様です！　柳川先生のお戻り、俺にはすぐ分かりますよ！　ところでどうでしたか、今年の先生のクラスの新入生達は？」

隣席の一年体育担当の矢貫誠吾（やぬきせいご）は、今から二年前にこのカノンに赴任してきた教師だ。

鋭い目つきのその精悍なマスクとは反対に、あけっぴろげで気さくな性格で女生徒を中心に数多くの生徒に慕われている。

緑は左側をチラッと一瞥するとすぐに視線を手元に戻す。

「そりゃあ私の足音はうるさいですからね。矢貫先生じゃなくても誰でも分かりますわ」

「おっ、なんだか今日はご機嫌斜めのようですね？　ホームルーム

で何かあったんですか？」
　誠吾は団扇で自分に風を送りながら身を乗り出してくる。暦はまだ四月になったばかりだが、普段から暑がりの誠吾に団扇は必需品なのだ。
「あの矢貫先生、団扇をお使いになるのは結構ですけどこちらにまでばさばさと風を送らないでいただけます？」
「おお～っ、どうやら今日の緑姫は本格的にご機嫌が悪いようですね」
「……いつも言ってますわよね。そのふざけた呼び方止めていただけません？」
「はいっ、それはそれは失礼つかまつりました！」
　誠吾は顔の横でビシッと敬礼をすると、椅子に座ったまま芝居がかった口調で大仰に頭を下げる。
　これ以上相手にする気も無くなった緑は誠吾を無視して携帯用の眼鏡をかけると、さっさと次の授業の準備に入りはじめた。
　あっさりとつれない態度をとられ、まだ緑と会話をしたかった誠吾は仕方なく緑の姓を呼ぶ。
「あの～柳川先生、今年の先生の坊主クラスはどうですか？　先生をてこずらせそうな悪ガキはいますか？」
　緑の脳裏につい先ほど涼しそうな顔で自分をからかった柴門要の顔が一番に浮かぶ。
「さぁ、まだ分かりませんわ」
「反抗しそうな奴がいたら遠慮せずに俺に言って下さい！　姫をてこずらせそうな奴は俺がビシッとシメときますから！」
　また誠吾が自分のことを「姫」と呼んだので緑は手を止め、眼鏡越しにジロッと誠吾の顔を見た。
　緑に睨まれてまたうっかり「姫」と呼んでしまったことに気付き、誠吾は頭を掻く。
「す、すみません柳川先生……」
　そう謝った後、誠吾は嬉しそうな口調に戻って話を続ける。

「俺の担当クラスはお嬢の一年二組なんですけどね、皆可愛いくていい子達ばっかりですよ！」
誠吾の言う「お嬢」とは“　女子校舎　”　と言う意味で、職員間での隠語のようなものだ。緑は抑揚の無い声ですかさず今の誠吾の言葉に応じる。
「良かったですわね。矢貫先生は幼くて可愛らしい子が特にお好きですものね」
「せ、先生！　ちょっと待って下さいよ！」
途端に誠吾が目をむいて反論する。
「その言い方はちょっとないんじゃないですか！？　まるで俺がロリコンみたいに聞こえますよ！？」
「あらそうでしたの？　私てっきりそうだと思っていましたけど」

団扇の動きがピタリと止まる。容赦の無い緑の言葉に誠吾が一瞬たじろいだのだ。
「……ひっ、ひどいな先生は！　あんまりですよ！　俺、今年の夏で二十七になるんですよ？　一回りも年の離れた女の子達にそんな感情持てないですよ！」
「あらそうですか。それは失礼しました」
緑は表情を変えずに冷たい声でそう答えるとまた授業の準備を始めた。
誠吾は納得のいかない顔で緑の横顔を見ていたが、やがて渋々自分の机に向き直った。

二人の間に沈黙が訪れる。
しばらくの間エアコンの作動する微かな音だけが職員室内を占領したが、誠吾は急にまた緑の方に向き直ると憤りを含んだ大声を出した。
「だっ大体ですねッ！！」
「キャッ！？」

いきなり誠吾が大声を出したので緑は驚いて持っていたボールペンを床に落としてしまった。
ボールペンは一度床で大きく跳ねた後、二人の後ろの方に転がっていく。
緑が驚いた様子を見た誠吾は憤りを腹の底に押し込んで声の音量を下げた。

「……大体、教師と生徒の恋愛はここの一番の禁止事項じゃないですかっ……！」

ありとあらゆる細かい規則があるカノンでは「職員と生徒の恋愛」は当然の如くタブー中のタブーだった。
誠吾は椅子からゆっくりと立ち上ると後ろに転がったボールペンを拾い、それをスッと差し出しながらじっと緑を見つめた。
何かを言いたそうな誠吾の様子に気付かないフリをした緑は、ボールペンを受け取ると「済みません」とだけ礼を言い、静かにまた机に向かう。
そんな緑の態度に誠吾はあらためて念を押すように言った。
「柳川先生、先生だってもちろん分かってらっしゃいますよね……！？」

しかしそれに対する返事は無く、ただサラサラと緑がボールペンを走らせる乾いた音だけが二人きりの職員室内に静かに流れ続けていた。

プロローグ　―　3　―

カノンの登校初日が無事に終了した。

「ね、モモ、途中まで一緒に帰ろうよ！」

スクールバッグを片手に沙羅が桃乃を誘う。今日半日で沙羅とだいぶ打ち解けることのできた桃乃は「うん！」と軽やかに返事をした。

「モモの家って何人家族なの？」

「うちは四人家族よ」

一緒に下校しながら二人はお互いの事や家庭の事などを色々と教えあう。

桃乃の家庭は父親と母親、そして四つ下の妹がいる四人家族だ。父親の倉沢雅治（くらさわまさはる）は出版社に勤務する編集者で、母親の千鶴（ちづる）は専業主婦。妹の葉月（はづき）は来年中学生になる。

沙羅の父親の南聡志（みなみさとし）は航海士で一年のほとんどが海の上であまり会えないため、今は母親のエリザと二人暮しなのだと沙羅は語った。

「あーあ、いいなぁ姉妹って。あたしもお姉ちゃんか妹欲しかった〜」

一人っ子の沙羅は姉妹のいる桃乃のことをとても羨ましがる素振りを見せる。

「でもいたら口ゲンカばっかりになるかも。最近妹すごく生意気になっちゃって」

「だけどやっぱり羨ましいよ。ホラ、“　Ｂｌｏｏｄ　ｉｓ　ｔｈ

ｉｃｋｅｒ　ｔｈａｎ　ｗａｔｅｒ”　って言うでしょ？」
「んっと、血は水よりも濃いってことね」
「そうそう」
「沙羅、中学で英語のテストなんかいつも満点だったでしょ？」
「うん、まぁね。でも単純なスペルミスは今でもしょっちゅうだよ。話すのはいいんだけど書くのは苦手なんだよね～」
「いいなぁ、私あんまり英語得意じゃないの。でも物理よりはたぶんマシだと思うけど……」
「あっ、あたしも物理は大嫌い！　だってこの間教科書見て眩暈がしたもん！　だからきっとこの先、物理の試験前夜は徹夜で公式暗記することになりそうだよ」
「あっ、沙羅も？」
「うん！　でもあたし、一夜漬けには結構自信があるからノープロブレム！」
楽しそうに笑い会う二人の姿は今日初めて知り合ったばかりとはとても思えない。

木立の通学路を抜けると駅はすぐだ。

「モモの家はどっちの方？」
カノンがある谷内崎（やちざき）駅から東へ行くルートは呉内（くれない）で、西は中和泉（なかいずみ）になる。
「私は呉内」
「なーんだ反対かぁー。あたしは中和泉なんだ。じゃあここまでだね。また明日ね！」
沙羅は右手を振りながら明るい声を出す。
「ねぇモモ。今度私の家に遊びにおいでよ！　モモをママに紹介したいんだ。『高校に入って最初のベストフレンドだよ』って！」
「うん、今度遊びに行くねっ」
近いうちに家に遊びに行く約束をした桃乃はそこで沙羅と別れて

家路に着いた。
桃乃の降りる駒平(こまだいら)駅は谷内崎から四つ目の駅で、その駅から十分もかからない場所に桃乃の自宅はあった。通学がかなり楽なのも桃乃がカノンを目指した理由だ。

「ただいま〜！」

三年前に外壁を塗り替えたばかりの家の玄関を開けると家の中から桃乃の母親、千鶴の声が聞こえてくる。
「おかえりなさい、桃乃。制服を着替えたらすぐに下にいらっしゃい」
「はーい」

桃乃が二階の自分の部屋で私服に着替えて一階に下りていくと、リビングいっぱいに甘い香りと深煎りされたコーヒー豆の香ばしい香りが混じりあって漂っていた。

「あら、ちょっと焼きすぎちゃったかも……」
専業主婦の千鶴の趣味はお菓子作りだ。今日のお菓子はココナッツをふんだんに使ったクッキーらしい。
白いフリルのエプロンにロングウェーブの髪が揺れる。
二十二で結婚しそのまま専業主婦になった千鶴は今年で三十九歳になるが、今まであまり苦労を経験していないせいもあって実際の年齢よりはるかに若々しく見える。
桃乃はダイニングテーブルの席につき、大きな器に盛られている焼きたてのココナッツクッキーを一口食べてみた。
「ううん、美味しいよ、お母さん」
「そう？　で、どうだったの、学校は？」
「うん、早速友達も一人出来たし楽しくなりそう。葉月はもう塾に行ったの？」

「ええ、ついさっき。でもよかったわねぇ」
桃乃の前にジノリのコーヒーカップが置かれる。
「ねぇ桃乃、昨日の入学式は本当に素敵だったわよね」
「もうお母さんたら卒業式でもないのに泣いてるんだもん、恥ずかしかった……。あの時泣いていたのお母さんだけだったんだからね？」
「だってカノンの制服着て座っている桃乃や冬馬くんの姿を見たらつい感動しちゃったんだもん。あぁそうだ、それで思い出したわ。あのね桃乃。今朝冬馬くんがあなたを迎えに来てくれたのよ？」
「……知ってる」

桃乃は苦々しい顔でコーヒーを啜った。

「あら、コーヒー濃く淹れすぎたかしら？」
娘の苦虫を噛み潰したような顔がコーヒーを濃く淹れたせいだと思ったのだ。
「明日から一緒にカノンに行くんでしょ？　冬馬くんと」
「だっ誰が！？」
その桃乃の剣幕に気圧され、おっとりタイプの千鶴は娘にそっくりな大きな目をパチパチとさせる。
「だ、だって冬馬くん、また明日も迎えに来るって言ってたわよ？」

「えっ、お母さん、それホントッ！？」
ソーサーに戻したコーヒーカップが勢い余ったせいでガチャンと盛大な音を立てる。
カノンへの通学路中、ずっと横で冬馬に「桃太郎」なんて呼ばれるのは真っ平ごめんだった。
明日は早く家を出よう、と思いながら桃乃が再びコーヒーを飲んでいると千鶴が自分にもコーヒーを淹れながら独り言のように呟く。

「でも冬馬くんもいつのまにかあんなに背も伸びて本当に凛々しくなったわよね。昔は“　ももちゃん一緒にあそぼ！”　って桃乃をよく誘いに来てくれたちっちゃい男の子だったのにね」
「お母さん、違うわ。凛々しくなったんじゃなくて憎たらしくなっただけよっ」

桃乃のその言い方に千鶴はクスクスとおかしそうに笑った。

「なに？　お母さん。何がおかしいの？」
「んーん、別に」
千鶴はコーヒーを一口飲むとフッと遠い目をした。
「そういえば桃乃もいつの間にかコーヒーをブラックで飲むようになってるのね……」
「え？」
「だって桃乃、前はお砂糖二杯も入れてコーヒー飲んでたじゃない？」
「だって太っちゃったら困るもん」
桃乃のその答えに千鶴は優しく笑った。
「じゃあ今日はお母さんが久しぶりにお砂糖入れて飲んでみようかな」
千鶴はシュガーポットから一杯の砂糖をすくうとそれをジノリのコーヒーカップに入れてティースプーンで掻き回した。
一口飲んでみるとさっきとは違った甘くて少しほろ苦い味が千鶴の口中にゆっくりと広がる。

「そうよね、皆いつの間にか大きくなっているんだもんね……」

今の千鶴の呟きの意味が分からなかった桃乃は、大きな目を何度も瞬きしながら不思議そうに母親の顔を見る。
「えっ？　お母さん、それどういう意味？」

「なんでもなーい。お母さんのひとり言ですっ」
娘の質問を「ひとり言」という言葉でうまくはぐらかし、暖かいコーヒーカップを両手に包んだ千鶴はゆったりと微笑んだ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

その後、夕食を終えて入浴も済ませた桃乃は、予習をするために自室へと戻る。
明日の授業で苦手な物理の予習をしようと思った桃乃だったが、ふと机の上に置いたままのカノンの年間行事予定パンフレットが目に入ってしまった。

何気なくそのパンフレットを手に取り、中を見ると月毎に何かしらの行事が書かれている。
確認のために今月の予定行事をもう一度調べてみたが、四月は一大イベントの入学式を除いてはオリエンテーリング以外に大きな行事はなかった。
さらにパラパラとページをめくると何ページにも渡って部活の紹介ページがあった。

（そういえば部活どうしようかな……）

中学時代はテニス部にいた桃乃だったが高校では違う部活にしてもいいなと考えていた。
沙羅はどうするのか明日聞いてみよう、と思いながら次のページ

をめくる。

現れたページはバスケ部の紹介ページだった。

男子と女子でそれぞれ部があるらしく、トップの紹介写真では長身のプレイヤー達が汗を飛び散らせながらシュートをきめようとしている。

男子バスケ部紹介写真の中で背番号４をつけ、右拳を振り上げてガッツポーズをしている黒い短髪の少年の背中が映っていた。その少年を見た桃乃の脳裏に冬馬の姿がよぎる。中学三年時の冬馬が背負っていた番号も同じ番号だったのだ。

――　広い体育館で得点が動く度に湧き起こる歓声。

――　ゴールを決めた選手の名のシュプレヒコールと高らかに鳴り響くホイッスル。

――　床に立っている足に直接響いてくるドリブルの強い振動。

――　綺麗な弧を描き、ゴールに吸い込まれていくバスケットボール。

白杜中学に入学したばかりの頃、バスケ部に入部して背番号１２をもらった冬馬は当時の桃乃にこんなことを話していたことがある。

「桃乃、俺一番が好きなんだよ。特に自分が好きなものには絶対に一番になりたいんだ。今はまだ実力足りないけどさ、そのうち必ず白杜で一番の選手になってやる」

――　そして二年後、冬馬はその実力を認められ、見事キャプテンに指名されたのだ。

（アイツって昔から自分で決めたことは必ず初志貫徹するのよね……）

昔のワンシーンを思いだし、桃乃はほんの一瞬だけ心の中で冬馬のことを見直した。

しかしすぐにその気持ちを強引に頭から追い払う。

（……って私、何アイツのこと見直してんのよ！　今は私のこと「桃太郎」なんて呼んでバカにする奴なのに！　お母さんが今日あんな変なこと言い出したからね　きっと……）

桃乃はパンフレットから手を離すとベッドにバフッと倒れ込んだ。と同時に桃乃の部屋をコンコンと可愛らしくノックする音がする。

「なぁに？」

起きあがった桃乃がそう返事をするとドアがカチャリと開いて、首を覗かせたのは妹の葉月だった。

「おっ邪魔しまぁ～すっ！」

妹の葉月は現在小学六年生。でも四つ離れた姉の桃乃がいるせいかその年よりもかなり大人な思考回路を持つ。

葉月はベッドに座っている桃乃の隣に腰をかけるとキラキラした瞳で喋り出した。

「ねぇねぇお姉ちゃん、カノンはどんな感じだった？　教えて！」

まだ四年も先の話しだが葉月もカノンへの進学を夢見ているらしい。自分の希望校に桃乃が合格して以来、葉月は姉を羨望の眼差しで見ていた。

「まだ一日目だしよく分かんないわよ」
「ね、ね、カッコイイ先生いた？」
ませている葉月には同年齢の男の子は子供に見えるらしく、好きになるのは必ず年上の男性だ。
そしてそれに関しては二人の父、雅治も男親ならではの極端な心配性ぶりを発揮して妻の千鶴にいつも笑われている。
「カッコイイ先生……？」

桃乃は今日一日で出会った男性教師の顔を思い出してみた。
化学や物理、数学の教師は男性だったが全員四十歳以上と思われる風貌で、しかもどうお世辞を見繕ってもカッコイイとは言えなかった。

「二十代でね！」
と更に葉月の細かい注文がつく。
「あ、そういえば私の担任の先生って二十代の男の人だよ」
「えー、幾つ幾つ？」
「んっと、確か今は二十六歳っていってたような……」
「カッコイイ？　何教えてるの？」
「体育」
「体育の先生？　じゃスポーツマンだ！　いいカンジー！　芸能人とかでいえば顔は誰に似ているの？」
どうやらかなり興味が湧いてきたらしい。
「……そうね……顔……。どうだったかなぁ……」

桃乃は担任の矢貫誠吾の容姿を思い出そうとしたが、なぜか脳内のイメージがぼやけてしまう。
なかなか担任の容姿をはっきり思い出せない桃乃の様子を見て、葉月が面白そうに茶化した。

「ねーお姉ちゃん。あたし達ってお向かいのお兄ちゃん達をずっと見てきているからさ、他の男の人でちょっとぐらい顔が良くってもなかなかカッコイイな、って思えなくなってなーい？」

ベッドに座っている葉月はそう言った後、足を揺らしながらエヘヘとおかしそうに笑う。

桃乃は葉月の言葉に内心は少し同意しながらも、引き続きなんとか誠吾の顔を思い出そうと努力した。

「……そうだ、思い出した。顔はちょっと目が鋭い感じで……うん、まぁまあカッコイイかも。体育の先生だから色黒で筋肉質体型なの。気さくな先生みたいだから男の子にも女の子に人気のある先生らしいわ」

「わぁ～さっすがカノンね！」

葉月はウットリとした顔で感嘆の声を漏らす。

「でもさ、葉月が入学する頃にはもうその先生いないかもよ？」

「あ～！　お姉ちゃん、どうしてそんなイジワル言うのよ～！」

「だって四年も後のことでしょ？　どこか違う高校に赴任しちゃってる可能性だってあるじゃない」

「う……」

葉月はグッと返答に詰まった。そんな妹を姉がさらにからかう。

「それに葉月がカノンに無事合格できるかどうかまだ分からないしね？」

「ごっ、合格するもんっゼッタイ！！」

葉月は母や姉と同じ大きな目をぱちくりさせて大声で叫ぶ。

「あたし塾に行き始めたの知ってるでしょ？　絶対、絶対、絶対合格するもーんだ！　なにさ、お姉ちゃんだって冬馬兄ちゃんと同じ学校行きたくてカノン目指したんでしょ！？　それだって不純な動機じゃん！」

今度は桃乃が大声で叫ぶ番だった。

「だっだっ誰が冬馬と一緒の学校に行きたいなんて！！」

「アレッ、違うの？」
「あったり前でしょっ！！　一体何を根拠にそんなことを思ってたのよ！？」
「だってさー、冬馬兄ちゃんってカッコイイじゃない！」

腰まである自慢のロングの黒髪を一束手に取ると、葉月はベッドに腰掛けたままで熱心に枝毛チェックを始めた。枝毛チェックをしながらも葉月の口は器用に動く。

「それに冬馬兄ちゃんってすごくモテるしねー。あ、そうだ！　あたし、お姉ちゃんにこの話してたかな？　あのね、今年のバレンタインの日に友達と家の前で遊んでたら、女の人が何人も来て冬馬兄ちゃんの家にチョコ置いていったの。そのうちの何人かはどうしても勇気出せなくて、あたしにチョコ渡すの頼んだ人もいたんだよ！」

桃乃は黙って妹の話しを聞いていた。
今年のバレンタインに冬馬にチョコを渡そうと、　学校だけではなく家にまで押しかけた女生徒達がいた事は桃乃も知っていた。
その次の日、クラスメイトが冬馬に合計幾つチョコを貰っていたかをしつこく訊ね、冬馬がそれをはぐらかしていた光景を思い出す。

葉月はふと枝毛チェックの手を止めた。
「そういえばお姉ちゃん、確か去年から冬馬兄ちゃんにチョコあげてないんだよね？　ね、どうしてなの？」

確かに桃乃は去年から義理ではあったが、冬馬にチョコを渡さなくなっていた。
それは冬馬が自分のことを急に「桃太郎」と呼ぶようになったの

でそれが嫌で仕方のない桃乃はその次の年からチョコをあげるのを止めたのだ。

「お姉ちゃんがその気ないんだったらあたしが冬馬兄ちゃん貰っちゃおうかな～？」

「ふ～ん、そうすれば？」

ややふざけ気味の葉月の挑発を桃乃は適当に流した。

「ん～、でもなぁ～……」

毛先を自分の人差し指にクルクルと巻きつけながら葉月は小さく眉をひそめる。

「冬馬兄ちゃんは優しいしー、カッコイイしー、スポーツマンだしー、確かに彼氏にするにはいいんだけどさ……」

自分が適当に打った相槌に本気で真剣に答えている十一歳の妹を見て、桃乃は笑いを堪えるのに苦労していた。

「でもちょっとまだ子供っぽい所があるからなぁ……。だからやっぱりあたし、裕人兄ちゃんがいい！」

桃乃はここで我慢できずにとうとう吹き出した。

「あ～！　なんで笑うのよお姉ちゃん！」

「だって葉月、あなたと裕兄ィ、一体何歳離れてると思ってるのよ？」

西脇裕人（にしわきゆきと）は冬馬と五歳違いの兄だ。

柔和な顔立ちでスラリと背が高く細身の裕人は、男性ファッション誌の表紙モデルを務めてもおかしくない容姿を持っている。

「たった九つしか違わないじゃん！」

と葉月が口を尖らせる。

「だって裕兄ィは今年で二十一になるのよ？　葉月みたいなまだ小さな子供を相手にするわけないでしょ」

「そんなことないもん！　だってこの間も裕人兄ちゃんさ、『葉月

ちゃんが大きくなったらお嫁さんにもらいたいな』って言ってくれたもん！」
「葉月、それはね、裕兄ィお得意のリップトークなのよ」
裕人は綺麗な女性とあらば誰彼かまわず優しくせまり声をかける、所謂プレイボーイだ。
今まで桃乃が見てきた中で、裕人の側に寄り添う女性が同じ女性だったことはほとんど無いといってもいいほど、裕人の姿を見かける度にその横にいる女性は大抵違う女性だった。
「ううん違うってば！　他の女の人にはそうだけどあたしのは違うのッ！」
しかしそう叫んだ後でなぜか葉月の声のトーンが落ちる。
「……うん……。でも確かに裕人兄ちゃんってさ、女の人に優し過ぎるよね……。そこが裕人兄ちゃんのたった一つの、最大の短所かもしれないね……」
葉月は小さな手を片頬につけ、はぁ、と小さくため息をつき、その大人びた仕草に桃乃は再び苦笑した。
その時、階下から千鶴の声が聞こえてくる。
「葉月、まだ起きているの？もう遅いから早く寝なさいね」
桃乃の部屋の壁時計の針はすでに十時半を回っている。
「いっけない！」
葉月は慌てて立ち上がり「じゃお姉ちゃんお休み～」と言いながら部屋を出ていった。
部屋に一人残った桃乃は教科書もノートもまだ用意していない机に向かい、小さく息を吐く。
もう今夜の予習をする気持ちは吹き飛んでしまっていたが、なんとか気持ちを奮い起こして物理の教科書を広げる。

（そういえば冬馬って理数系に強いから、物理って得意そう……）

ハッと我に返る。

また無意識に冬馬のことを考えてしまった桃乃は慌てて二三度頭を振って冬馬を意識の外に追いやった。

今日家に帰ってきてから頭の中に何度冬馬が出てきただろう。

しかし意識の隅へ追いやっても、桃乃の頭の中にはすぐにまた冬馬の姿が現れる。

いつも気付くとまるでそれが至極当たり前の光景のように、冬馬はいつも側にいた。

最近、ふとしたきっかけですぐに冬馬のことを考えてしまうのは“　昔からの幼馴染だから　”、そして「桃太郎」と呼ばれていることでイライラさせられているから。

きっとそのせいなんだ、と桃乃は思った。

しかし心の奥底から声にならない声がする。

……本当にそれだけ？

自分の気持ちなのになぜかよく分からなかった。

（結局、今日はお母さんのあの言葉が発端だったなぁ……）

その後約一時間机に向かって熱心に予習を続けた桃乃は、枕元の目覚ましをかけると急いでベッドにもぐり込んだ。

オレンジのクロスバイク　【前編】

カノン登校二日目の朝は昨日よりさらに快晴だった。
桃乃は一通りの身支度を済ませるとバッグを持って一階へと下りる。

「おはよう　桃乃」

フリルのついたエプロンを身につけた母の千鶴が、サラダボウルをテーブルの中央に置きながら桃乃に声をかける。その少女趣味的なエプロンは夫、雅治の好みだ。
「おはよう、お母さん。ね、お父さんなんであんなところに寝ているの？」
桃乃は父のいる場所をそっと指差した。雅治はリビングのソファーに横たわり、手足を縮めてぐっすりと眠り込んでいる。
「お父さんね、明け方に帰ってきたばかりなのよ。今仕事がすごく立てこんでいるみたい。だから今は少し寝かせてあげて」
桃乃は眠りこけている父の姿をもう一度見る。
髪はくしゃくしゃで髭も少し伸びはじめていたが普段は滅多に外さない、その眼鏡を外した父の寝顔見るのは久しぶりだった。
「ねぇお母さん、お父さんて眼鏡外すとちょっとカッコイイんじゃない？」
「あらなに言ってるの、お父さんは眼鏡かけてても充分カッコイイわよ」
「あーはいはい、そうでした……」

学生時代、大恋愛の末に結婚した雅治と千鶴は今でも超がつくぐらいのおしどり夫婦だ。

朝から親のノロケを聞かされた桃乃は少々げんなりしながらロールパンを一口頬張る。オーブンで焼き上げたばかりの熱々のパンは中はしっとりとしていてとても香ばしく、思わず頬が緩んだ。

「ん～！　やっぱり焼きたてのパンって美味しい！」

「はいこっちもどうぞ」

絶妙のタイミングでベーコンエッグの皿が桃乃の前に置かれる。ベーコンはたった今までフライパンから与えられていた熱でまだパチパチと弾ける音がしている。

「サラダもちゃんと食べるのよ？」

「分かってる。もう子供じゃないんだからいちいちそんなこと言わないで」

「フフッ、そうだったわね。桃乃は子供なんだけど実はもう子供じゃないのよね」

「……お母さん昨日からなんかヘンだよ？」

「気にしない気にしないっ。お母さんのひとり言よひとり言っ」

千鶴はそう歌うように口ずさむと、次に起きてくる葉月用のベーコンエッグを作りにキッチンへと戻っていった。

（今日は少し早く出なくっちゃ……）

桃乃はサラダを食べながら壁掛け時計を見る。家を早く出るのはもちろん玄関先で冬馬とかち合わないためだ。やがて二階からバタバタと騒々しい足音が聞こえてくる。

「あら葉月ね……。もう、お父さんが起きちゃうわ」

下の娘をたしなめようと千鶴がキッチンから急いで出てきたが、一瞬早くリビングの扉がバタンと大きな音と共に勢いよく開く。

「おっはよう～！」

いつものように元気よく朝の挨拶をしながらリビングに入ってきた葉月だったが、母と姉が自分の方を見て唇に人差し指を立てているのを見ると不思議そうに首をかしげた。
「……どうしたの？　お母さんもお姉ちゃんも」
「葉月、今お父さんが寝ているのよ。だから静かにしてね」
「え？　あ～ホントだ。お父さん、今日朝帰りしちゃったんだねっ」
「ちょっと言葉の使い方が違うような気がするけど……」
千鶴は笑いながら葉月の席の椅子を軽く引く。
「さ、早くゴハン食べなさい」
「はーい」

今の葉月が出した騒音にも雅治はほんの少し体を動かしただけで相変わらずグッスリと眠っていた。よほど疲れているらしい。
桃乃は最後のロールパンの切れ端を食べ終わるとさっさと席を立った。

「あれお姉ちゃんもう行くの？　今日は昨日より早いんじゃない？」
「そうね、今日学校で何かあるの？」
「ん、ちょっと用事があるから……」
桃乃は食べ終わった食器を台所に下げながら母と妹に適当な返事をし、洗面台に向かった。もう一度歯を磨き、唇に保湿タイプのリップクリームを薄く塗って玄関へと急ぐ。その途中でもう一度リビングに顔を出し、千鶴と葉月に小声で「行ってきます」と声をかけた。
「行ってらっしゃい」
「お姉ちゃん行ってらっしゃーい」

玄関から一歩外に出た桃乃は、急いで向かいの「西脇」と表札の

かかっている家に目をやる。
西脇家の玄関付近に冬馬の姿が無いことを確認した桃乃は安心して早足で駅へと急いだ。
駅に着き、腕時計を見る。このままだと学校に着いてもだいぶ時間が余りそうだった。一時限目の予習でもしていようかな、と思いながら電車に揺られてカノンへと向かう。

カノンのある谷内崎駅へ着く。
電車を降り、桃乃はスクールゾーンを歩き出した。
周りは緑に囲まれ小高い丘まで続くこの道は人通りが少ない。朝早くこの木立の道を歩いているのはほぼカノンの生徒か関係者だといってもいいくらいだ。そして今この道を歩いている生徒は桃乃以外見当たらない。

（う～ん　気持ちいい……）

朝から緑でいっぱいの木々の間を歩くのはとても気持ちがよかった。気のせいか空気までもがおいしく感じられる。鳥のさえずりがたまに聞こえるこの道を時間に余裕のたっぷりある桃乃はゆっくりゆっくりと散歩気分で歩いていた。
その静かな空気の中、桃乃の後方から何かが回転している金属音のような音が微かに聞こえてきた。
なんだろう、と思った桃乃が振り返ろうと思ったその瞬間、わざとキキーッと派手な音を鳴らして一台の自転車が桃乃の前に強引に割り込んで止まる。
その自転車の主を見た桃乃が叫ぶ。

「冬馬！？　」

オレンジに輝く車体の上にはスクールバッグを背負ってニッと笑

う冬馬がいた。
「おい、なんでお前今日も先に行っちまうんだよ。なにかの用事があるみたいよ、っておばさんが言ってたけどさ、用事ってなんなんだよ？」
「別に冬馬には関係ないでしょっ」
（冬馬に会わないようにする用事よっ）と桃乃は心の中で呟く。
「せっかく今日はこれでお前を送っていこうと思ってたのによ」
口を尖らせた冬馬の額にはうっすらと汗が滲んでいた。息も少し弾んでいる。
「そういえば桃太郎は二組なんだってな。今朝おばさんに聞いたぜ」
「だからその名前やめてってば！」
「俺、四組だからな。覚えておけよ？」
「知らないっ！　冬馬が何組でも私には関係ないもん！」
自分から完全に顔を背けた桃乃の様子を見た冬馬は、さりげなく話題を変える。
「なぁ、このクロスバイク、カノンに合格したお祝いに買ってもらったんだぜ。見てみ？　すげぇカッコイイだろ？」
桃乃は横目で買ったばかりらしいそのピカピカの自転車を眺める。
確かに冬馬が乗っているこのクロスバイクは安価な量産タイプの自転車よりもデザイン性に優れ、ストレートなハンドルから車体に続くフォルムがとても綺麗な自転車だった。
だが、その車体の後ろにはなぜか鮮やかなオレンジ色のボディとはまったく違う銀色の荷台が取り付けてあり、そこに少々ちぐはぐさを感じる。
「その荷台、ついてないほうがいいんじゃない？　自転車の色と合ってなくて何かヘン」
「これは後からつけ足したからな。カッコはちょっと悪くなっちま

ったけど必要だから仕方ねぇよ」
冬馬は「ほら」と言うとその荷台にポンと片手を置く。
「え？」
「早く乗れよ」
「イ、イヤよ！　なんで私が冬馬の自転車の後ろに乗らなきゃいけないのよっ」
「いいから乗れって。これ快適過ぎてさ、全然トレーニングにならねぇんだよ。後ろに五十キロの重り乗せたら少しはトレーニングになるからさ」
「なっ……、誰が五十キロよっ！」
「桃太郎、五十キロないの？」
「ないわよっ！」
桃乃は正面の幼馴染に向かって怒鳴る。
「ふぅ～ん……」
クロスバイクに乗ったままでそう呟くと、冬馬の視線は桃乃の頭のてっぺんからつま先まで何度も往復をしはじめる。
「ちょっと、そんなにジロジロ見ないでよ……！」
上から無遠慮に自分の体をつぶさに眺められて桃乃の両頬が赤らむ。
恥ずかしさでいたたまれなくなった桃乃はクロスバイクの横を擦りぬけて先へ行こうとしたが、すかさずその細い左腕を冬馬がガシッと掴んだ。
「い、痛いってば！　離してよ冬馬！」
「いいから後ろに乗れって」
冬馬は桃乃の腕を掴んだままで続ける。
「……乗るまで離さねぇぞ？」
キッと顔を上げて桃乃は冬馬を睨んだが、自分以上に冬馬の目が真剣だったため、やがて桃乃の目から抵抗を示す強い光がゆっくり

と消えてゆく。
「の、乗ればいいんでしょ、乗れば」
「あぁ」
渋々と桃乃は後ろの荷台に横座りをして腰をかける。しかし冬馬はまだペダルに足をかけずに肩越しに桃乃を見た。
「ほらちゃんとつかまれよ」
「つかまるってどこに？」
「ここに決まってんだろ」と冬馬は自分の腰を軽く叩く。
「イ、イヤよっ」
再び自分の頬がほんのりと少し熱を帯びてきたことを感じた桃乃は冬馬から視線を逸らした。
「ここから坂道なんだぞ。つかまってねぇと危ねぇだろ」
「だっ、だってバッグあるもんっ」
「ちょっと貸せ」
冬馬は桃乃のスクールバッグを取り上げるとそれを左のハンドルと一緒に握った。
「ほらつかまれよ」

最早これ以上拒否する理由も思いつかなかった。
仕方なく桃乃は冬馬の体に遠慮がちに手を伸ばしそっと掴まる。

「いいか？」

その言葉の後、オレンジのクロスバイクは桃乃を乗せて走り出した。
風がどんどんと横に流れていく。
前を見ると冬馬の大きな背中と風になびくカノンの青いブレザーが目に入った。
桃乃はその背中を見上げながら、つい先ほど額に汗を滲ませ息を切らして自分の前に現れた冬馬の様子を思い出す。

（冬馬……もしかして私に追いつくためにあんなに必死になって飛ばしてきたのかな……？）

さっきはこの自転車に乗るのを嫌がったが、そう思うと少しだけ胸に微かな痛みを覚える。

「おっ、やっぱり後ろに重りがあるといいな！　ペダルがグンと重くなった！」

桃乃を乗せているだけではなく、上り坂のせいもあって今のペダルは相当重く感じられているはずなのになぜか冬馬の声はとても弾んでいる。

「お、重いなら下りるわよ！」

「いいんだ、それがトレーニングになる！」

冬馬は後ろを振り返り、そう叫ぶとさらにグイグイとペダルを力強く踏みしめる。

「……ヘンな冬馬」

「あ？　なにか言ったか？」

「……ううん、別に……」

浮かれた冬馬が思い切り飛ばすせいで、大して時間もかからずにカノンの正門が見えてきた。

「げっ！　またあの先生かよ……」

クロスバイクのペースが突然ガクンと落ち、冬馬はうんざりとした声を出した。

桃乃も体をひねって冬馬の影から前方を見る。すると昨日と同じように正門前に緑が立っているのが見えた。昨日は黒だったが今日は淡いピンク系のスーツを着ている。

冬馬が正門前で一旦クロスバイクを止めると桃乃は慌てて後ろの荷台から下りた。

「おはよっス」
「お、おはようございます」
「おはよう。あらあらあなた達、二日連続で一緒にご登校ね？」
その言い方は明らかに裏に何か含むような言い方だった。昨日に引き続いてのそんな態度に我慢できなくなった冬馬が緑に食ってかかる。
「一緒に登校するのが悪いってんですか！？」
「えぇ今日はね。残念ながらよくないわよ？」
緑はなぜか余裕たっぷりの表情で受け答える。
「なんでだよ！　ここの規則がかなりうるさいことは知ってるけどさ、男女が一緒に登校するのを禁止するなんて規則はないはずだ！」
憤る冬馬を眺める緑はフフッと妖艶な笑いを浮かべると、昨日とは違う色のパール系のネイルでトン、と軽く冬馬の胸を突く。
「君、本当に可愛いわね」
「いッ！？」
いきなり胸を小突かれて冬馬はおかしな奇声を上げ、桃乃は緑のその行動に驚いて口に手を当てて唖然とした。
「ねぇ西脇くん、自転車は軽車両でしょ。二人乗りは道路交通法上、立派な違反行為なのよ？」
「あっ」
冬馬はそっちの方か、という顔をする。
「今日は見逃してあげるけどもう二人乗りしちゃダメよ。分かった？」
「……うぃっす」
冬馬は仕方無さそうに頭を掻いた。　緑は今度は桃乃の方を見る。
「ね、あなたも“　乗せて　”　なんてもう言っちゃダメよ」
「違います！　こいつは悪くないです！　俺が無理やり乗せたんですよ！」

冬馬は慌てて口を挟むと、「ほら」と預かっていたバッグを桃乃に返した。緑は再び冬馬のほうに視線を移す。
「この子を庇ってるの？　西脇くんって優しいのね。私ますますあなたのこと気に入りそう」
緑は冬馬の方にグイと左肩を寄せ、それと同じ距離分、冬馬は慌ててクロスバイクの上で身を仰け反らせた。
「しっ、失礼しますっ！　じゃなっ！」
冬馬は最後のセリフを桃乃に向けて言うと、あっという間にクロスバイクで男子校舎の方に去って行ってしまった。

正門前に緑と桃乃の二人だけが残される。

「し、失礼します……」
気まずい雰囲気の中で桃乃もそそくさと女子校舎の方へ行こうとすると、「ちょっとお待ちなさい」と声がかかり、緑に引き止められた。
「あなた、倉沢さんだったわよね」
「は、はい」
「ねぇ、西脇くんとはお付き合いしているの？」
「つ、付き合ってません！」
「あらっ、ふ～ん、そうなの……」
自分の質問に慌てて否定をしてきた桃乃に緑は意外そうな顔をし、一時桃乃から視線を外すと何かを考えているようだった。
「あの……、先生は毎日ここにいらっしゃるんですか？」
「えっ？」
考え事の最中に桃乃からいきなりそう訊かれ、緑は一瞬驚いた様子を見せる。
「いいえ、ここにいるのは今週だけよ。この正門には毎朝教師が一名必ず立って不審者が校内に入らないようにチェックしているので、今週は私が当番ってわけ」

緑は桃乃にそう説明すると、もう一度同じ質問を投げかける。
「それよりあなた、西脇くんとは本当にお付合いはしていないのね？」
「は、はい」
「そう」
桃乃の返事を聞いて緑は満足そうに微笑んだ。
「分かったわ。それならいいの。引き止めちゃってごめんなさいね」

「い、いえ……」
そう語尾を濁して返事をすると桃乃は再び女子校舎の方に足を向ける。正門前に緑を残し、桃乃は校舎の中に入った。自分の靴箱に外靴を片付けながら今の緑の様子を思い返す。

（あの先生、もしかして冬馬のこと……？）

なぜか心がざわついた。
そしてその日一日、パールの粒がきらきらと輝くネイルで冬馬の胸をツンと突いたあのシーンは忘れようとしても桃乃の脳裏にいつまでもこびりついて消えなかった。

オレンジのクロスバイク　【後編】

疾風の勢いで緑の前から逃げた冬馬は、校舎横に設置されてある自転車置き場へ向かった。クロスバイクの前輪を車止めに置いてチェーンをかけていると、昨日初めて教室に入った時とまったく同じように背後から声がかかる。

「よっ、色男のご登校だな」

冬馬はしゃがんだまま振り向く。そこには同じクラスの柴門要が立っていた。

「……またお前か」

この男が自分を嫌っていることを昨日初めて顔を合わせた時から薄々と感じていた冬馬は、チェーンをかけ終わると冷たい声で立ち上がる。

「今、たまたま正門の近くにいて見ていたけどよ、お前モテるんだなぁ。早速あの色気ムンムンの担任となかなかイイ雰囲気だったじゃん。なぁなぁ、お前って年上もイケるクチなわけ？」

ポケットに両手を突っ込んだままで話す要を無視し、冬馬は校舎の中に入ろうとする、だが要は素早い身のこなしですかさず冬馬の前に回りこみ、その行く手を遮った。

「……どけよ」

要より背の高い冬馬は相手を見下ろして低い声で牽制した。しかし要は威嚇混じりのその声にもまったく動じる素振りすら見せない。

「まぁ待てよ、まだお前に聞きたいことがあるんだ」

要はニヤリと笑うと今度は女子校舎の方角を顎で指し示す。
「今の女の子、お前の彼女か？」
「お前に何が関係あるんだよ」
「いや今見たらかなりの可愛い子だったなぁと思ってさ。俺、ああいう清純そうなタイプ、次の獲物で狙ってるんだ。でさ、あの子の名前とクラス、教えてくれよ？」
冬馬の目の色がはっきりと変わる。
「あいつに変な真似したらただじゃおかねぇからなっ！？」
冬馬はそう叫ぶと要の制服の胸倉を掴みあげた。しかしそれでも要はまだ平然とした態度を崩さない。それどころかその顔には嘲るような笑みさえ浮かんでいる。
冬馬が乱暴に手を離すと要は乱れたネクタイをほどきながらからかうように言った。
「なぁそんなに大事なのか、あの娘？」
しかし冬馬は返事をせずに無言で数秒間要を睨みつけた後、そのまま校舎の中へ入っていってしまった。薄ら笑いを浮かべてその後姿を見送った後、要はほどいていた自分のネクタイを一気に外す。
「やっぱあっちの方か……」
そう独り言を呟き外したネクタイを弄びながら、要は「侵入禁止」と札の置かれてある薄暗い裏道の方へ向かう。その道の途中には高さ二メートルほどの金網が張り巡らされてあった。そのフェンスに足をかけ軽々と乗り越えると、要はネクタイを結び直しながら女子校舎へと続く未知の区域に侵入し、そのまま裏道を足早に進んでいった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

◆◇◆◇◆

その頃、桃乃はまだ誰も来ていない一年二組の教室にいた。自分の席にストンと腰をかけ、バッグの中の教科書類を机の中に入れはじめる。

その時ふいに教室の後ろの扉がコンコンとノックされた。

椅子の上から後ろの方を見ると扉はもうすでに開いており、端正なその顔に小さな笑みを浮かべた要が扉に寄り掛かったままで桃乃の方をじっと見ていた。

今、この女子校舎に男子がいる事実が信じられなくて、桃乃はしばらくポカンと口を開けて要の顔を見つめる。

要は微笑みながら桃乃に向かって小さく手を上げた。

「おはよう。君、名前は？」

しかし桃乃はまだ唖然としたままでいきなり現れた要の顔を見ている。

「あ、そっか。女の子に名前聞く前にまずこっちが名乗んないとね。俺、柴門要っていうんだ」

要は扉から離れると桃乃にゆっくりと近づく。桃乃は思わず椅子から立ち上がって左側を指差した。

「こっここは女子校舎よ！？　男子校舎は反対！」

「ん？　知ってるけど？」

「エッ……」

要にあっさりとそう返されて桃乃はその先の言葉を失う。

「俺、君に用事があってきたんだ。君の名前知りたくってさ」

「あ、あなた誰？」

「だから柴門要だって。あ、クラスは一年四組ね」

（冬馬と同じクラスだ……）

と桃乃は即座に思った。

「キミさ、西脇冬馬とはどういう関係なの？」

要は矢継ぎ早に質問を続ける。

「さっき君と西脇が一緒に登校するの見てさ、西脇に“　今の女の子すごく可愛いな”　って言ったら“　じゃあ直接行って会ってこいよ”　って言われたんだ」

「えっ、冬馬が……？」

「うんそう。会ってこい、なんて言われたしさ、まさか君、西脇の彼女じゃないよね？　それとも彼女？」

「ち、違うわ」

「そっか、じゃあ俺にもまだ望みあるわけだ」

要は教室内隅々にまで響くぐらいの明快な音で指を鳴らす。

「君、すっごく可愛いから俺気に入っちゃったんだよね」

「……！」

男子から面と向かってこれだけ強烈にアプローチされた経験の無い桃乃は赤くなって俯いた。

「ね、名前教えてくれるかな？」

「……」

「あれ？　別に警戒しなくていいんだよ？　俺、これでもマナーのいい紳士なんだからさ」

ニッコリと微笑むその口元から真っ白で綺麗な歯並びがのぞく。

しかし桃乃は赤くなって黙り込むばかりだった。

返事が戻ってこないので内心舌打ちをしながら何気なく要は桃乃の机の上に目をやる。

そしてそこに自分の知りたい答えがあるのを見つけた。

「へぇ、倉沢桃乃っていうんだ？」

名前を言われた桃乃は驚いて要の視線の先を見る。
すると机の中にしまおうとしていたノートの表紙に自分の名前が書いてあるのが見えた。
「名前も可愛いじゃん！　あのさ、今度一緒にお昼でも食べない？　ここじゃ昼ぐらいしか男子と女子が顔合わせることないしさ。ね？」
だがそんな誘いの言葉をかけたくせに、要は桃乃の返事を待たずにスゥッと教室の扉の方に戻る。
「じゃ、こんなところにいるの見つかるとヤバイから俺、そろそろあっちに帰るわ。楽しみにしてるよ」
要はもう一度微笑みながら桃乃に向かって小さく手を振ると、風のように教室の外に出ていった。
桃乃はしばらく唖然としていたが、やがて要が出ていった扉に駆け寄るとそこから上半身を出して廊下を見渡す。
しかしもう要の姿はとっくに消えていた。
整った顔立ちの要からいきなり強烈なアプローチをうけ、赤く上気した頬で桃乃は要が去った廊下の先をしばらく見つめる。

（今の男の人……なんだったの？）

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

その頃、先ほどの要の態度で冬馬の頭には完全に血が昇りきった状態だった。
とりあえず教室に入ったものの、気持ちが落ち着かない。
そこで少し冷静になるべく、ホームルームが始まる時間まで校庭に設置されてあるゴールポストでシュートの練習でもしようと、教

室の備品のバスケットボールを手に冬馬は廊下に出た。するとその廊下の先から要がこちらに歩いてくるのが目に入る。
要は冬馬の姿に気付くとサッと視線を逸らした。
冬馬も苛立つ気持ちを抑えながらお互いそのまま黙ってすれ違おうとした瞬間、要が低い声でボソリと呟く。

「なにっ！？」

低く響いてきた今の言葉に、険しい表情で冬馬が振り返る。
相手の焦る気配を素早く背中で感じとった要はフッと乾いた笑みを漏らし、悠々と四組の教室内へと消えていく。たった今すれ違いざまに要に投げ捨てられたその言葉に衝撃を受けた冬馬は、廊下の中央で愕然と立ち尽くした。

「……俺、お前の大好きなあの桃乃ちゃんと今度お昼の約束しちゃったぜ？」

要の勝ち誇ったような声が何度も脳内をリフレインする。
右手の甲に青く太い静脈がくっきりと浮き上がり、バスケットボールを掴んでいる五本の指がギリギリと悲鳴のような音を立てていたことにすら気付かず、再び冬馬の頭に急激な勢いで血流が沸騰し始めていた。

すれ違った心　<1>

「裕人！　いつまで寝てるつもり！？　さっさと起きなさぁい！」

時刻はもうすぐ午前十時。

夜遊びが長引き、明け方に帰宅してグッスリと眠っていた裕人の頭上から大声が降ってきた。

「……母さ～ん……、頼むからもうちょっと寝かせてくれよ……。今日の授業午後からなんだからさ……」

「なーに言ってんの！　毎晩毎晩夜遊びばっかりして！　少しは冬馬を見習いなさい！」

冬馬と裕人の母、西脇麻知子（にしわき まちこ）は大声で裕人を叱ると部屋のカーテンを全部開け放った。男の子二人を育てたせいか見かけも性格もボーイッシュな所がある女性だ。

「……だから母さん、昨日は大学の授業で遅くなったんだって……」

部屋中に一気に差し込んできた朝日の容赦ない眩しさに、裕人は顔の前に手をかざして目を細める。

その返事を聞いた麻知子はベッドの側にツカツカと歩み寄ってくると、裕人の頬を一瞬だけ軽くムニッとつまみあげた。

「どこの世界に朝帰りまでする授業があるっていうの！？」

「あるよ？　今世紀に生きる人類の、深夜繁華街におけるそれぞれの行動パターンをゼミで調査しているんだ。その調査で出た傾向を詳細なレポートにまとめて……」

「いいからバカなこと言ってないでさっさと起きなさいっての！」

言い訳を諦めた裕人はベッドから一気に起きあがると、母親につ

まれた自分の頬を労わるようにさすった。
「母さん、頼むから顔つまむのはやめてくれよ。俺の顔が崩れたら何人の女の子が悲しむことか」
「あーあー、崩れなさい、崩れなさい。逆にそのほうが勉強に集中できていいんじゃないの？」
「ひどいな、母さんは……」
「冬馬を見なさい。朝は早くから起きて学校に行って、夜はちゃんと予習もやって……。衍人みたいに女の子のお尻ばっかり追っかけてないわよ？」

即座に衍人の右手が軽く上がる。

「おっと母さん、そこは異議ありだね。俺は女の子のお尻なんて追っかけてないよ？　女の子達が俺を追っかけてくるの。それにさ、女の子を追っかけているのは俺じゃなく冬馬のほうだよ？」
「えっ冬馬が？　まっさか～！」
麻知子は衍人の今の言葉を全然信用していない様子でアハハと笑う。
「あれっもしかして母さん知らなかったの？」

長身の衍人はベッドから降りるとウ～ンと大きく伸びをする。上に大きく上げられた両手はあと十センチ足らずでグリーンのクロス貼りの天井に届きそうだ。

「あいつ、桃乃ちゃんにベタ惚れなんだよ。いっつも桃乃ちゃんの後ばっか追っかけてるじゃん」
「あー……」
桃乃の名前を聞いた麻知子は何か思い当たったような表情になる。
「じゃあやっぱりそうなのね。冬馬が桃乃ちゃんの所によく行くの

は高校もまた一緒になったし、幼馴染だからかなーとも思っていたんだけど……」
「違う違う。甘いな、母さんは」
母親の鈍感さに裕人が笑う。
「あいつはね、もうずーっと昔から桃乃ちゃん一筋なんだよ」
「そういえば冬馬ってばさ、昨日の朝、倉沢さんの家に寄って桃乃ちゃんと一緒に学校に行こうとしたみたいなのよ」
「な。たぶん今朝も誘いに行ったんじゃないかな。あの新品のクロスバイクでさ」
「でも今朝は一人で乗って行ったみたいだけどね……。ね、桃乃ちゃんは冬馬のことなんとも思ってないのかしら？」
「ん～、実は俺もその辺がまだよく見極められないんだよなぁ。最近の桃乃ちゃんってどうも冬馬を避けているような感じがするしさ」
「あら、そういう事を見抜く能力しかないのに、さすがの裕人も分からないんだ？」
「……母さん、そこまで言う？」

いつもは穏やかな顔を少々崩し、心外だと言わんばかりの顔で裕人が反論する。

「確かに俺は冬馬と違って遊び人だけどね、冬馬ほどじゃなくても俺だってそこそこの学力はあるつもりだよ」
「はいはい。じゃあそれを証明するためにも少しは夜遊びを控えて勉学に励みなさいっていうの！」
「はは、そうきますか……」
母親の切り返しの早さに感心しつつも、裕人は自分に不利なこの話題を自然に変える。
「じゃあ俺がさ、今度桃乃ちゃんにさりげなく聞いてみるよ」
「えっ冬馬のことを？」

「うん。血を分けた、たった一人の可愛い弟だしな、できれば好きな娘と上手くいってほしいじゃん」
「そうね、桃乃ちゃんはいい子だしねぇ……。そうだ！　もし桃乃ちゃんがお嫁さんに来てくれたら相手のお家は倉沢さんだもの、千鶴ちゃんとは気心も知れているし、親戚付合いも肩肘張らなくていいわよね！」
「母さん、さすがにそれは気が早過ぎだって」

麻知子の発想の突拍子さに裕人は苦笑する。

「じゃ母さん、着替えるからちょっと出てってくれない？」
「なによー、別にいいじゃん。恥ずかしがる事ないでしょっ、実の親子なのに今更ー！」
「実の親子でもプライベートがあるの！」
麻知子を強引に部屋から追い出すと裕人はクローゼットを開けた。シャワーはつい数時間前にホテルで浴びてきたばかりだ。

（そろそろ本気で車の事を考えなきゃなぁ……）

女と夜遊びするにはやはり自分の車が必要だと最近の裕人は考えていた。
今日は午後からのゼミで裕人が研究発表をする番だ。今密かに狙っている娘が自分と同じゼミを受けているのであの娘に今日はいい所を見せなくっちゃな、とついつい気合も入る。
しかし真剣に服を選びながらも、器用な裕人は頭の中で同時にまったく別の事を考えていた。

（ん～桃乃ちゃんをいつ誘って訊き出そうかなぁ……）

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

裕人に部屋を追い出された麻知子は階段を下りながらもう一人の息子のことを考えていた。

（そっか……冬馬ももうそういう年頃なのねー……）

結婚してすぐに裕人を身ごもり、五年後に冬馬を産んだ麻知子は現在四十五歳。

二人の子供が段々と自分の手から離れ始めているのを最近の麻知子は特に強く感じるようになっていた。それを認めたくないせいなのか、麻知子は裕人はともかく、冬馬はまだまだ手のかかるやんちゃな男の子だと思いこもうとしていた。

だが、冬馬の桃乃に対する気持ちを裕人から聞き、いよいよどちらの我が子も自分の元から巣立っていく準備が始まっている事実を知った麻知子はほんの少しだけだが淡い寂寥感を感じずにはいられなかった。

しかし倉沢家の一家は皆とても良い人達だし、今までもいいご近所づきあいをさせてもらっている。そして向かいに住む者として倉沢家の子供達を小さい時からずっと見てきている麻知子は、自分や夫の親戚の子ども達よりも、桃乃や葉月のことを可愛く思っていた。

（桃乃ちゃんならいいわ　安心して冬馬をまかせられるもんね）

常に物事を前向きに考える麻知子はあっさりと頭の中を切り替える。そして一階に下りると、裕人に言い忘れたことを思い出して二

階に向かって叫んだ。
「裕人〜！　母さん、千鶴ちゃんと婦人会の集まりに行ってくるからね〜！　出かける時、ちゃんと家の鍵かけて行ってよ〜？」
「了解〜！」
二階から鼻歌まじりの声が聞こえてくる。
麻知子は手早く出かける支度をすると向かいの倉沢家に千鶴を迎えに行った。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

倉沢家の玄関へと入ると麻知子はインターフォンを押す。押してすぐに千鶴のおっとりとした声が聞こえてきた。
「はい。どちら様ですか？」
「私よ、千鶴ちゃん」
「あ、麻知ちゃん？　いけない、もう行く時間ね。ちょっと待ってて」
プツリ、とインターフォンが切れる。
麻知子は玄関先で千鶴が出てくるのを待ちながら倉沢家のミニガーデンを見ていた。
わずかなスペースながらも綺麗に手入れされ、季節の花が咲き誇る倉沢家の小さな花壇は花好きな千鶴の性格が如実に表れている。
（私ももうちょっと千鶴ちゃんを見習ってこういうことしなくっちゃね……）

麻知子は自分の家の玄関先を振り返りため息をついた。
自宅の玄関先はとりあえず、という感じで大きめのパキラが一鉢とリビングにポトスを二、三個置いてあるだけで、それも麻知子が花よりも観葉植物が好きだからというわけではなく、ただ単に頻繁に手入れをしなくてもなかなか枯れないから、といういささか情けない理由だ。

元来のさっぱりとした性格と子供が二人とも男の子だったせいで、どうしても麻知子は千鶴のようにフリルのエプロンをつけたり、花を愛でたりという女らしさに欠けているところがあった。
そしてそれは麻知子自身もよく自覚していて、千鶴のように髪を伸ばしてウェーブでもかけてもう少し女らしくなろう、と何度か一念発起したこともある。
しかし、いざ自分の髪が肩に届く頃になるとどうしてもそれが邪魔に感じられ、結局最後は美容室に駆け込んで思いきり明るめのブラウンのカラーを入れて元のベリーショートにして戻してしまうパターンの繰り返しだった。
自分は自分、人は人、と思っていても身近で千鶴のようなおっとりとして女らしい女性を見ると、やっぱりこれでいいのかしら、と今も麻知子は思い悩むことがある。

（たぶんウチの子達がいかにも女の子らしい子が好きなのは、きっと私の姿を見てきているからなんだろうなぁ……）

衍人がいつも連れている女性達のタイプや、千鶴によく似ている桃乃を見ると、殊更に麻知子はそう思わざるを得なかった。
そう考えた麻知子がなんとなく気分が落ち込みがちになった時、ガチャリと玄関の扉が開きかける。　千鶴が出てきたのかと思い、麻知子はふざけた口調で「もう、遅いわよ～！」と声をかけた。
しかし次の瞬間、麻知子は「あっ…！」と口を開けて絶句する。

「いやぁ～お恥ずかしい。ちょっと寝過ごしてしまいましてね、こんな時間になってしまいました」

玄関から出てきたのは千鶴ではなく雅治だったのだ。

「いっいえ！　そんなつもりで言ったんじゃないんです！　済みません！」

麻知子は真っ赤になって雅治に謝った。少し遅れて千鶴も玄関先に姿を現す。

「あら、どうしたの？」

「あっ千鶴ちゃん！　わ、私千鶴ちゃんが出てきたのかとばっかり思って……！」

慌てて弁解しようとする麻知子を見て、雅治の眼鏡の奥が何かを思いついたかのようにキラリと光った。

「いえいえ、元はと言えば僕ごときが重役出勤の真似なんかするからいけないんです。……ねぇ、麻知子さん？」

「と、とんでもないですッ！」

麻知子はぶんぶんと豪快に首を横に振る。

「もう雅治さんたら、麻知ちゃんをからかうのはやめてちょうだい」

恐縮しまくる麻知子を見て千鶴は夫をたしなめた。

雅治は悪戯をし終わった少年のように満足げにニコッと笑うと、千鶴と麻知子に「行ってきます」と言い車に乗り込む。

クラクションを小さく二度、そしてマフラーの排気音を大きく鳴らしながら雅治が出かけてしまうと麻知子はフゥッと大きく息を吐いた。その安堵のため息を聞いて千鶴が申し訳なさそうに謝る。

「ごめんね麻知ちゃん。ウチの人、時々ああやってわざと人をからかったり困らせたりするところがあるの」

「ううん。間違えたとはいえ失礼なことしたのは私だし。じゃ、行きましょ！」

今日は千鶴達が住む町内の主婦を対象にした、二ヶ月に一度の婦人会が開催される日だ。千鶴と麻知子は婦人会の行われる会館へ並んで歩きがてら、早速たわいのないお喋りを始める。

「ねぇ、千鶴ちゃん、雅治さん今日どうしてこんな時間に出勤しているの？」

麻知子は千鶴より六つ年上だが、お互い子供の年も近く、この土地に同時に越してきた時からの付き合いのため、二人はいつの頃からかそれぞれお互いを下の名前で呼ぶようになっていた。

「雅治さん、明け方に帰ってきたのよ。なんでも今度新しく創刊される雑誌の準備で今、仕事が大忙しみたいなの。さっきまでリビングで仮眠取ってたのよ」

「じゃあろくに睡眠取らないでまた会社に行ったの？」

「えぇ」

「まさに企業戦士って感じね。ウチの旦那にも見習ってほしいわー。ウチなんて毎日朝八時に家を出て夜六時にきっかり帰ってくるのよ。いやんなっちゃう」

「いいじゃない。毎日きちんと同じ時間に帰ってくるなんて。羨ましいわ」

冬馬と衍人の父で、麻知子の夫でもある啓一郎（けいいちろう）は役所に勤める公務員だ。

「そういえば麻知ちゃん、今日雅治さんね、明け方帰ってくる時に家の前で衍人くんに会ったって言ってたわよ？」

「衍人の奴、今日朝帰りしたのよ」

麻知子は大袈裟にため息をついてみせる。

「大学に行くようになってからもう遊んでばっかり。ちゃんと勉強してるんだか……」

「衍人くんなら大丈夫よ。昔からやる時はちゃんとやる子だったじゃない」
「そうだといいんだけどね」
肩を竦め、そう相槌を打った麻知子はここであることをふと思い出した。
「……ねぇ千鶴ちゃん。今朝、もしかしてまた冬馬そっちにお邪魔した？」
「えぇ来たわよ。素敵な自転車に乗ってね」
「やっぱりか……」
どうやら衍人の言っていた事は本当らしいわね、と麻知子は内心で思った。
「冬馬くん、今日も桃乃を迎えに来てくれたんだけどね、桃乃なにか用事があるみたいで朝早く出ちゃってたのよ。ごめんなさいね」
「千鶴ちゃんが謝ることないわよ。ウチの息子が勝手なことしてるんだから。こっちのほうこそごめんね」
「ううん。今日桃乃が帰ってきたら言っておくわね。明日は冬馬くんと一緒に学校に行くと思うわ」
「……ん……」

今の千鶴の言葉にどう返事をすべきか迷った麻知子は曖昧な返事をしてしまった。
もし桃乃が冬馬との登校を嫌がって先に出かけていたとしたら桃乃に申し訳ないし、しかし母親として冬馬が桃乃と通学したがっているのならさせてやりたいという親心もあったせいだ。
「で、でもね千鶴ちゃん。もし桃乃ちゃんが少しでも嫌がってるみたいなら無理に言わないでね？　絶対よ？」
千鶴は何を言うの、と言わんばかりの笑顔で微笑んだ。

「桃乃が嫌がるわけないじゃない。幼馴染の冬馬くんなのに」

（そうだといいんだけど……）

麻知子は心配する気持ちを隠し、千鶴に合わせて表面上は笑顔を見せた。

すれ違った心　<2>

「モモ！　お昼にしようよ！」

四時限目の古文が終わり楽しい昼休みの時間だ。

桃乃は沙羅と机を合わせ、教室で一緒にお弁当を広げる。

「あ～モモのこれ何？　美味しそう　！」

「これ？　厚揚げじゃないかな」

「ね、あたしのこのマスタードチキンと一個交換しない？」

「うん、いいよ」

沙羅は桃乃と交換した厚揚げをパクッと頬張る。

「すっごく美味しい！　よく味が染みてて！」

「ウチのお母さん料理得意なの」

「へぇ～。ウチのママ、和風料理はあんまり得意じゃないんだよね。どうしても洋風に偏っちゃうのよ。あ、もちろんママの作る料理は大好きなんだけどね」

そう言うと沙羅は手元のカラフルな弁当箱に視線を落とした。

「高校生になったんだし、そろそろお弁当ぐらいは自分で作らなきゃダメかなぁ。でもあたし、朝は弱いし……、そういえばモモって朝何時頃学校に来ているの？」

「んっと、今日は七時半前だったかな」

「そんなに早く！？　まだ部活も始まってないのにどうしてそんなに早く来ているの？」

冬馬のことを知らない沙羅に、幼馴染と顔を合わせたくなくて早く家を出たことを話せるわけもなく、桃乃は無難な返事をする。

「だって満員電車嫌いだし……」
「そんなに朝早く来てたらヒマじゃない？」
「う、うん、そうなんだけど……」
と答えながら桃乃は今朝、自分の身に起きたあの出来事を思い出す。
「ねぇ沙羅」
「なに？」
「今朝ここに男子が入ってきた、って言ったら信じる……？」
「この教室に？」
「うん」
「Ｗａｏ　！　スゴーイ！　だって女子校舎に男子が入るのってここの規則では禁止されてるよね？」
「そう。だから私もビックリしちゃって……」
「その男の子と話したの？」
桃乃はもう一度頷く。
「ねっ、ねっ、どんな感じの男子だったの？　二枚目？　カッコイイ？」

沙羅の反応は昨日の葉月とまったく同じで、桃乃は思わず噴き出しそうになった。
なんとかそれを堪えて朝に出会った要の姿をもう一度思い出して見る。
どちらかというと細身で繊細な感じのする要の雰囲気は向かいに住む衛人の持つ雰囲気に近いものがあった。

「ん……カッコよかった、かも……」
「見たかった～！　……でもその人、何しにこっちに来たんだろうね？　もし先生にでも見つかったら大変なのに、こっちによっぽど大切な用事でもあったのかな」
「さ、さぁ……」

要が禁を犯してこちらの校舎に侵入してきたのは自分の名前を聞きにきたということを知っている桃乃はその沙羅の言葉を聞いて赤くなった。その赤面した顔を見て沙羅が不思議そうに尋ねる。
「なんでモモ、赤くなってるの？」
「な、なんでもない！　なんでも！」
頬の熱を冷ますために手にしていたノートで自分の顔を仰ぎ始めた時、表紙に書かれている自分の名前が目に入った。

（へぇ倉沢桃乃っていうんだ）

自分の名を呟いた要の声が頭の中で流れる。
再び顔が熱くなってきたのを感じた桃乃は、沙羅に気付かれないよう、ノートで仰ぐスピードをわずかに早めた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

その日の夜、倉沢家のインターフォンが鳴った。
いつもは雅治の帰りが遅くてなかなか一家団欒の夕食が取れない倉沢家だが、今夜はその雅治が久しぶりに早く帰ってきたので和やかな夕食がちょうど終わった時だった。

「あら、こんな時間に誰かしら」

と千鶴が呟きインターフォンの受話器を取る。
「はい、どちら様でしょうか？　……あら冬馬くん？　どうしたの

？　え、桃乃？　いるわよ、ちょっと待っててね」
千鶴は通話ボタンを切るとキッチンに食器を下げている途中の桃乃を呼ぶ。
「桃乃～」
「なぁに、お母さん？」
キッチン入り口のビーズ暖簾を片手で避け、その隙間から桃乃が顔を出す。
「今冬馬くんが来ているのよ。桃乃にちょっとお話があるんだって。冬馬くん玄関で待っているから早く行きなさい」
「エッ、冬馬が！？」
「もしお話長くなりそうなら上がってもらいなさいね」
「い、いいわよ！」
姉に続いて食器を下げていた葉月が茶々を入れる。
「何も恥ずかしがることないのに、お姉ちゃんってばさ」
「どういう意味よそれっ」
「ほら桃乃、早く行きなさい。冬馬くん、外で待っているんだから」
千鶴の催促に桃乃は仕方なくリビングを出て玄関に向かう。
サンダルを履いて玄関に出ると、上下真っ白のジャージを着た冬馬が玄関前の階段に座っていた。
振り返った冬馬の額には玉のような汗が流れていて息も少し荒い。

「……また走ってるの？」

桃乃は座っている冬馬の後ろに立ったままでそう呟く。
「あぁ、二月に入ってから受験であまり運動してなかったからな。久しぶりに走ってみたら思いっきりきつくなってんの。体、メチャクチャ鈍ってる」
冬馬は再び前を向くと首にかけていたブルーのスポーツタオルで汗を乱暴に拭いた。

「部活も冬になってからほとんどやってなかったもんね」
「夏の大会が終わっちまえば三年は実質引退みたいなもんだからな」
「うん」
その後しばらく会話が途絶え、冬馬の荒い息が少しづつ収まりはじめる頃、桃乃が先に口を開いた。
「……で、用事ってなに？」
冬馬は一瞬その返事を遅らせると、桃乃に背を向けたままで訊いた。
「お前、今日柴門要って奴に名前教えたのか……？」
自分から積極的に教えたわけではないが、それをどのように説明すればいいのか分からなかった桃乃の返答が一瞬遅れる。
「教えたのか？」
冬馬が背中を向けたまま再び訊く。
「か、勝手に見たのよ。私のノートに書いてあった名前を」
「一緒に昼飯食う約束もしたんだって？」
「ちゃんと約束したわけじゃ……」
桃乃がそう言いかけると冬馬はそこでいきなり立ち上がり、階段に片足をかけると桃乃の方を振り返った。
その冬馬の形相を見て驚いた桃乃は先の言葉を失う。
冬馬は恐いくらいに真剣な顔で桃乃の顔を見つめ、激しい口調で言った。
「いいか！？　あの柴門要って奴には絶対近づくな！　分かったなッ！？」

鬼気迫る冬馬の様子に少し臆しながらも桃乃は精一杯反論する。
「ど、どうして冬馬にそんなこと命令されなきゃいけないのよ！？」
「どうしてもだ！」
「そんなの理由になんないもん！」
不意に肩に痛みが走った。
冬馬が急に凄い力で桃乃の両肩を掴んだのだ。
「お前のために言ってるんだぞ！？」
冬馬の大きな掌は桃乃の細い肩を何度も揺さぶる。
「痛い！　痛いってば！」
「分かったなッ！？」
桃乃は全身の力を入れてやっと冬馬の手を振り払った。
「冬馬のバカッ！！」
桃乃はそう叫ぶと玄関に飛び込み、扉をバタンと勢いよく閉める。
「あら桃乃、冬馬くんには上がってもらわなかったの？」
リビングから千鶴の声が聞こえてきたが、桃乃はそのまま階段を上がって自分の部屋へと戻った。
部屋に入るとゆっくりとベッドの淵に腰をかける。
掴まれた時の鈍い痛みがまだ両肩に残っているのを感じ、そっとカーディガンを脱いでみる。するとまるで淡い桜の花びらのように、うっすらと赤い痣が冬馬の指の跡の形そのままに肌の上に散っていた。
（ちくしょう、あんな風に言うつもりなかったのに……）
桃乃を怒らせてしまった冬馬はタオルで口元を覆うと黙って自宅

へと戻る。
あんな乱暴なやり取りで桃乃がちゃんと分かってくれたかどうかが冬馬には気がかりだった。
本当はもっと順序良く筋道を立てて、要のことや、要と自分の衝突を上手く桃乃に伝えるつもりだった。しかしいざ「要に名前を教えたのか」と訊いた後、冬馬は自分で自分を抑えられなくなってしまったのだ。

ふと月明かりの下で自分の大きな手を見てみる。

桃乃の肩を掴んだ時、自分のこの掌に桃乃の両肩がすっぽりと収まっていたことに今更ながら冬馬は軽い驚きを覚えていた。
見つめていた自分の掌に思いきり力を入れて握り拳に変える。
理由は分からないが、要が自分を見る眼には憎しみがこもっている。そのせいで桃乃が傷つくような事態が起こることだけはなんとしてでも避けなければならない。

冬馬はそんな暗澹とした気持ちを抱えたまま、足取り重く自宅の扉を開けた。

すれ違った心　<3>

一夜が明けた。
冬馬によって両肩につけられた桜色の痣はさらに薄い色に変化し、この分なら今日中にはほとんど目立たなくなるくらいにまで回復しそうだった。
部屋の壁に取り付けてある大きな姿見に映るその痣が、昨夜の冬馬の異様な様子を桃乃の記憶から呼び覚ます。しかし、真っ白いカッターシャツに袖を通し痣が完全に隠れてしまうと、昨夜の出来事は本当にあったことなのだろうかという半信半疑の気持ちに変わっていた。

（そういえばあんな冬馬の顔、初めて見た……）

壊れそうなくらいの力で桃乃の両肩を掴み、柴門要に近づくなと叫んだ冬馬の顔は、今までずっと近くにいた幼馴染の桃乃ですら見たことがない表情だった。
朝食を取り、身支度を整えた桃乃は昨日と同じように家族に出かける挨拶をして玄関の外に出る。
家を出てすぐに桃乃の顔が強張った。
玄関先の道路に冬馬がいたのだ。

「……おっす……」

今朝の冬馬の声はいつのも声とは明らかに違う、気落ちした声だった。桃乃が出てくるのを待っていたらしく、クロスバイクに乗っている。
昨夜のことは本当にあったことではないのではないかという気持

ちでいた桃乃だったが、申し訳なさそうな冬馬の視線がその気持ちを打ち砕いた。

「……おはよ」

型通りの挨拶を返し、玄関の門を開けて道路へと出る。

そのまま駅の方向へと歩き出そうした桃乃を謝罪の言葉が引き止めた。

「昨日は悪かった」

一瞬だけ足を止め、感情を押しとどめた声で答える。

「……いいの、もう」

感情の起伏がまったく感じられないその返事を聞き、冬馬の顔に浮かんでいる後悔の色がより一層濃くなる。

「あ、あのさ、駅まで送っていくよ」

「いいの。歩いていく」

「昨日の詫びの代りに……さ。な……？」

もう一度、「いいの」と冬馬の申し出を断ろうとした桃乃だったが、リビングの窓から千鶴が微笑みながら見ているのに気付くと断るのを止めた。昨日、千鶴から「明日もし冬馬くんがまた迎えに来てくれたら今度はちゃんと一緒に行きなさいね。せっかく毎日来てくれているのに」と言われていたからだ。

家の中から手を振っている千鶴に不信に思われないように作り笑いを浮かべ、一度だけ手を振り返すと桃乃は仕方なくクロスバイクの荷台に腰をかける。そして「駅まででいいからね？」と小さな声で念を押した。

「……あ、あぁ」

本心はカノンまで一緒に行きたい冬馬だったがこうやって素直に後ろに乗ってくれただけでも良かったと思い直し、駅に向けてクロ

スバイクは走り出した。

二人の家から駒平の駅は自転車なら五分ほどでついてしまう距離だ。

小さな抵抗の返事を一つしただけで後はおとなしく後ろに乗った桃乃の気持ちを推し量るかのように、クロスバイクはゆっくりと低い速度で移動する。

冬馬が反省しているのは充分に分かっているのに、クロスバイクの後部で揺れに体を任せながらポツリと桃乃は呟いた。

「……冬馬、変わったよね」

思わず冬馬は荷台の方を振り返る。

「変わった……？　俺が？　どういうことだよ？」

桃乃は冬馬の問いには答えずにもう一度同じことを口にした。

「変わったよ、冬馬」

たぶん昨夜自分が取り乱してしまった事を言っていると確信した冬馬は、それ以上追求せずにまた前方に視線を戻した。

沈黙の中、クロスバイクは走り続ける。

しばらくの間二人の間に起った音らしい音といえば、クロスバイクの車輪が低速で回転する音だけだった。

やがて駒平駅の前に着くと冬馬はブレーキをかけて桃乃の願い通りに一旦クロスバイクを止める。そして桃乃が急いで荷台から降りる前にまるで宣言するように言った。

「俺は何も変わってないぜ？」

それを聞いた桃乃は肯定も否定もしない。

代りに荷台から降りて礼を言った。
「送ってくれてありがと」
桃乃からお礼を言われた冬馬はまたためらいがちな声に変わる。
「な、カノンまで乗っていかないか？」
「ううん、ここでいい」
「桃太郎はまだ怒ってるんだな……」

クロスバイクに跨っている冬馬は明らかに落胆していた。
その言葉を聞いた桃乃は、今まで聞きたくても聞けなかった事を今ここで思い切って聞くことにする。

「怒ってないけど、一つだけ教えてほしいことがあるの」
要との事をもう一度改めて説明したかった冬馬は安堵の様子を見せる。
「答えたら後ろに乗っていくか？」
「……考えてみる」
とだけ答え、正面から冬馬に向き直る。
「聞きたいことって昨日の話しのことだろ？」
「ううん、違う。冬馬、どうして私のことを桃太郎って呼ぶの？
二年前まではちゃんと私の名前呼んでくれていたのに」

自分の予想とは全然違ったその質問に冬馬の顔に驚きの色が走る。

「教えて。そしたら昨日のことは忘れるから」
しかし冬馬はクロスバイクのハンドルを握ったまま微動だにせず、その質問に答えなかった。
そんな冬馬にしびれを切らした桃乃は自分の想像している答えを口に出す。
「……私のことバカにしてそう呼んでるんでしょ？」

冬馬はハンドルから手を離し、慌てたように叫んだ。
「ちっ、違うッ！」
「じゃ、どうして？」

再び冬馬は沈黙した。
黙って向かい合う二人の横を通勤や通学の人々が足早に通り過ぎていく。

「言いたくないならいい……。冬馬、もう朝に私を迎えに来ないでね？」
最後にそれだけを一方的に伝えて、桃乃は冬馬に背を向ける。そして一度も振り返らずに改札口を通り、駅構内へと消えていった。
答えを言えない以上引き止めることも出来ず、冬馬はクロスバイクに跨ったままで離れて行く桃乃の背中を見送る。
やがて揺れる艶やかな黒髪が自分の視界から完全に消えると、桃乃の知りたがっていたその答えを自分自身の胸の中だけで呟いた。

（お前を意識し過ぎていて気恥ずかしいからだよ）

この答えはどうしても言えなかった。
しかし桃乃の事を「桃太郎」と呼ぶようになってから、自分達の間にすれ違いの溝が出来ていることは間違いのない事実で、このままでは自分は桃乃から完全に嫌われてしまう、という小さな焦りの芽がこの時初めて冬馬の中で生まれる。

桃乃を乗せた電車が目の前を走り去ってゆく。
それをじっと見つめながら、冬馬は自分に決断の時が訪れているのを感じていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

車内の窓から冬馬がこの電車を見送っているのが見える。
つり革に掴まっている桃乃の胸がチクチクと痛み出した。「カノンまで送る」という冬馬の誘いを冷たく断った自分がとても非情なように思えたからだ。

なぜ自分のことを「桃太郎」と呼ぶのか、その理由は分からなかったが、少なくとも昨夜の事に関しては冬馬はきちんと謝罪し、充分に反省している様子だった。
それなのに「明日から迎えに来ないで」などと冬馬を思いきり傷つけるような台詞まで置いてきてしまったことを考えると桃乃の胸の中に後悔の気持ちが湧き起こり始める。
もし時間を戻せるとしたら、素直にカノンのすぐ側まで冬馬に送ってもらっていただろうなと思いながら桃乃はつり革を握り直す。

その後悔の念は電車が一駅進む毎に大きくなり、は出来ることならすぐにでも先ほどの言葉を撤回し、今すぐ冬馬に謝りたくなっていた。毎朝、自分を迎えに来てくれていたことに決して他意はなく、純粋な厚意だということを桃乃自身がよく分かっていたからだ。しかしすでに走り出してしまっている電車は今の二人の距離を縮めるどころか、逆に遥か彼方に引き離してしまっている。

谷内崎駅に着くと、カノンまでの道のりを桃乃はいつも以上にゆっくりとしたペースで歩き始めた。
あのオレンジの自転車のペダルを漕ぐ持ち主が自分に追いついて

くれるように。

カノンの正門がもうすぐ見えてきてしまう。しかしまだ冬馬は現れない。

後ろを振り返ってみても通ってきた早朝の通学路には誰もいない。

またしばらくの間、ゆっくりと歩いた。そしていっそのこと、この場所で冬馬を待っていようかと思った時、やっと背後から自転車の音が聞こえてきた。

なぜその音が聞こえてきた時にすぐに振り返らなかったのだろう、そしてどうして声をかけなかったのだろう、と桃乃はすぐに後悔することになる。

冬馬の方からきっとまた声をかけてくれる、そう思っていた桃乃は、後ろからクロスバイクの車輪の回転する音が聞こえてきているのに、前を見たまま気付かぬふりをして歩き続けていたのだ。

真横を通り抜けた風に、桃乃の髪がフワリと広がる。

風を巻き起こしたクロスバイクは一瞬で桃乃を抜き去り、ペダルを漕ぐ冬馬の大きな背中がみるみる内に遠ざかってゆく。

自分に声をかけずにそのまま追い越していったその姿を呆然と見つめる中、朝日に照らされたオレンジの車体はあっというまに視界から消え去って行った。

さっきよりも大きく胸がズキンと痛み、そしてやっと桃乃は気が付く。

後ろからクロスバイクの音がどんどんと近づいているのに一度も振り返らなかった自分の背中が、冬馬から見ればそれがたぶん“無言の拒絶”に見えていたことに。

あなたを信じられない

定例会議がまもなく始まる時間だ。会議開始の合図の音楽が校内に流れ出す。

カノンでは隔週金曜日の午後四時半から教職員全員が集まってそれぞれ授業内容が予定通りに進んでいるか、何か問題を起こしそうな生徒はいないかを報告し合う会議がある。

この会議は必ず全職員が出席することが義務づけられており、欠席することは許されなかった。

定例会議はカノンの理事も出席し、理事長の黒岩秀樹（くろいわ ひでき）が毎回議長を務めている。その恰幅のある見かけ通りの威厳ある声で、第一会議室に黒岩の第一声が響いた。

「皆さんお疲れ様です。では定例会議を始めたいと思います。今学期も新入生が入学して早二週間が経過したわけですが、先生方の方で何か問題が発生していることはありませんでしょうか？」

黒岩はこの自分の発言の後、会議室全体を見渡して教師一人一人の顔を見た。

会議室はシンと静まり返り、誰一人黒岩の発言に返答するものはいない。

「……特にないようですね。ではまず一年担当の先生方から報告していただきましょう。矢貫先生、お願い致します」

「はっはいッ！」

最初に指名された誠吾はガタガタと大きな音を立て、慌てて椅子から立ち上がった。

会議室の全員の目が誠吾に向けられる。

（あーあ……、俺、どうもこの雰囲気にはいまだに馴染めないんだよな……。しかもなんでわざわざスーツを着なくちゃいけないんだよ……）

この定例会議には全員スーツ着用で出席することが義務付けられている。

いつも愛用のジャージを渋々脱いで堅苦しいスーツを着なければならないこの会議は、誠吾にとってはかなり憂鬱なことだった。

「規則」という絶対的な権力を得た縦縞のネクタイは、誠吾の首元を容赦無く力任せにグイグイと締めつけてくる。とにかく一刻も早くコイツを外したい、そう思いながら誠吾は担当教科の進捗状況を報告し始めた。

「え、え～、で、ではわたくしの一年の体育のほうですが、現在のところは特にどのクラスも授業の遅れは出ておりません。生徒の授業への参加状況も良く、ほぼ全員参加しております」

即座に黒岩の鋭い指摘が飛ぶ。

「……ほぼ？　ということは参加していない生徒が若干名いるということですね！？」

「あ！　え、その、そうですね……まぁそういうことに……ハァ……」

誠吾の隣の席に座っていた緑は、その情けない狼狽ぶりを横から見上げて小さくため息をついた。

「矢貫先生。体育の授業をボイコットしている生徒は一体何名くらいいるのですか？」

「い、いえ！　ボイコットではないです！」

誠吾は大声を出し、何度も手を振って黒岩の発言を必死に否定した。

「じ、実は一年二組の女子クラスの生徒で笹目梨絵（ささめりえ）という女生徒が

いるのですが、どうやら体が弱いようで体育の授業はいつも見学しているんです」
「……当学園では入学前、事前に生徒達の健康診断を行っております。その女生徒の個人履歴書に身体上の何らかの疾患が記載されていましたか？」

誠吾は痛い所を突かれた、という表情になった。

「い、いえ、ありませんでした」
「ではその女生徒が体育の授業を受けていないのは立派なボイコットではありませんか？」
黒岩は咎めるような口調で更に誠吾を責める。
「そ、それは……」
「矢貫先生、来週の定例会議までにその生徒になぜ授業を受けないのかを問い正して下さい。場合によっては学審会にかけますので」
「ちょっ、ちょっと待って下さいッ！　まだ新学期が始まってから二週間しか経ってないんですよ？　たまたま体の調子が悪かっただけかもしれないじゃないですか！　それをいきなり学審会にかけるだなんて……！」

――　「学審会」とは「学生審問会議」の略称で、授業を受ける際に著しく態度の悪い者がいた場合、その生徒を呼び出してその理由を問い質し、素行を正す会議のことだ。この学審会で注意を受けても態度を更正しない生徒には、停学や退学への最後通知を言い渡す一つ前の勧告のような意味を持つ会議でもあった。

「ですからその前に矢貫先生からアクションを起こして下さいと言っているのです。当学園は伝統と規律を重んじる学校法人です。素行に問題のある生徒がいた場合は速やかに対処し、場合によってはその危険分子を排除しなければなりません」

「きっ、危険分子だなんて……！」
誠吾の額にサッと青筋が立った。
理由もろくに確かめずに生徒を危険分子呼ばわりした黒岩に向かって怒鳴りつけようとした瞬間、誠吾のスーツの上着のすそがグッと力強く引っ張られる。
「！？」
驚いた誠吾が上着を引っ張られた左隣を見ると、シレッと素知らぬ顔で緑がわざと誠吾から視線を外した。
何かを言いかけた誠吾が結局何も発言しなかったので黒岩はそのまま言葉を続ける。
「矢貫先生、来週の定例会議でこの件についてまた報告して下さい。では次に柳川先生、お願い致します」
次に黒岩に指名された緑はスクッと立ち上がった。
誠吾は仕方なく渋々と着席する。
「では報告させて頂きます。私の英語ですが、男子の一年三組がわずかに遅れております。ですが、これは来週前半には充分追いつく範囲内です」
「柳川先生、一年三組の授業が遅れるような原因が思い当たりますか？」
緑は黒岩の質問に落ち着いて答える。
「はい。昨日の授業中に生徒の一人が腹痛を訴えた後、少量ですが教室内で嘔吐しました。生徒を保健室へ連れていった後、教室内の後始末をした為に授業に遅れがでました」
「そうですか。来週中には遅れを取り戻せるのですね？」
緑はもう一度「はい」、と自信に満ちた返事をし、続けて発言する。
「それと先週、私が正門前のチェック担当だったのですが、新入生の中で異性同士で一緒に登校してきた生徒達がいました。この学園は異性の交流に関しては厳しい規則があります。男子生徒の方は私の担当クラスの生徒でしたので、引き続き指導していきたいと思っ

ております」

この緑の発言に会議室が少しざわついた。

そんなざわめきの中、誠吾の耳に「さすがは破壊魔ですね」と誰か他の教職員がこっそり呟く声が聞こえてきた。学園内で交際する生徒達を独自の強引な指導で幾度と無く壊してきた緑は、密かに職員の間でそんな影の名をつけられているのだ。

「分かりました。授業の方は問題は無い、ということですね。その生徒達の指導もよろしくお願いします。それとこれは私の個人的な意見なのですが……」

黒岩は眉をしかめて緑の全身に視線を走らせた。

「私から見ると柳川先生の服装は教職者としては少々過激すぎるように思えるのですがね？」

会議室の視線が一気に緑に集まる。

緑の豊かなEカップの胸を覆うスーツはいつもボディラインにピッタリと添っており、下のスカートはいつもタイトミニだ。

「もう少し若者を指導する教職者としてふさわしい服装をしていただけませんか？」

緑の左眉がピクリと小さく反応した。

「柳川先生、どうですかね？」

黒岩はすかさず畳み掛ける。

その言い方はあくまで丁寧にお願いをしている形だが、実際は有無を言わせない命令だということは会議室の職員全員が周知の事実だ。

「……わかりました。善処します」

渋々だが緑はそう言わざるを得なかった。

「結構です。では次の方にいきましょう」

そして黒岩は次の教師を指名したので緑は再び席に腰を下ろす。
隣席の誠吾が会議中ずっと何かを言いたげに何度も緑のほうをチラチラ見ていたが、緑はそれをすべて最後まで無視した。

一時間半後、やっと定例会議が終わり、やれやれと言いたげに教職員達は第一会議室を後にしはじめる。

「柳川先生！」

その波に乗って会議室から出ていこうとした緑を誠吾は呼び止めた。
緑は誠吾を見ると黙って足を止める。　誠吾は急いで緑の側に近寄った。
「ちょっとお話があるのですが……？」
まだ大勢の教職員達が残る会議室を見渡すと緑は誠吾だけに聞こえる音量で言った。

「……三十分後、屋上で」

それだけを告げると緑はサッと身を翻し、会議室を出ていった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

カノンには男子校舎、女子校舎の他にもう一つ建物がある。
その建物は「中央塔」といい、男子校舎と女子校舎を繋ぐほぼ中間地点に建っている建物だ。
つい今しがたまで定例会議が行われていた第一会議室はこの中央塔の四階にある。
一階には教職員や学生が利用できる食堂や購買があり、二階が教職員室、三階が理事長室で四階から五階が会議室だ。屋上はさらにその上の六階部分に位置している。

誠吾はわざと少し遅れて一番最後に会議室を出るとそのまま屋上に向かった。
中央塔の内部は職員室や会議室が中心でこの建物にはいつも大勢の職員がいるので、この塔の屋上に生徒が上ってくることはほとんど無い。
その代わり男子、女子、どちらの校舎の屋上も常時施錠はしていないので、男子は男子校舎の屋上、女子は女子校舎の屋上で休み時間などにそれぞれたむろっているらしい。

ネクタイの結び目に指を突っ込んで襟元を大きくグィッと緩め、スーツの袖を大きく捲ると、誠吾はスーツの内ポケットから煙草を一本取り出して口に咥えた。
年季の入ったジッポーライターの蓋をカチッと鳴らし、火をつける。
段々と濃くなる赤い夕暮れ空に紫煙がゆっくりと立ち昇っていくのを見上げながら、誠吾は屋上で一人、ボーッと緑を待った。

六本目の煙草に火をつけた時、屋上の重い鉄の扉が軋んだ。
そして扉を大きく開けたせいで、一瞬だけ自分に向けて強く吹き

込んできた突風に少し驚いた様子の緑が現れる。
「……やっ矢貫先生！　こんなところで煙草なんか吸わないで下さい！」
扉を開け、誠吾の姿を見た緑は開口一番で注意を放つ。
（俺、いっつもこの女（ひと）に怒られてるよな）
誠吾は心の中だけでそう思い、苦笑した。
「なにをニヤニヤしているんですか！？　人を呼び出しておいてまったく……」
緑は文句を言いながら誠吾の側に来ると腰に手を当てた。緑お得意のポーズだ。
誠吾は今火をつけたばかりの煙草を指に挟み、緑にかからないように顔を横に向けて風下の方にゆっくりと煙を吐き出す。
「……先生、さっきなんで俺の背広引っ張ったんですか？」
「当たり前じゃないですか！　あなたあの時、黒岩理事長に歯向かうつもりだったでしょ！？」
「だって先生！　理事長のヤロー、俺の担当クラスの生徒に向かって“　危険分子　”　なんて言いやがったんですよ！？　許せますか！？」
「だからってあの時感情にまかせて怒りを爆発させていたら、あなた今頃どうなっていたか分かってるの！？」
緑は眉を吊り上げて誠吾を睨む。
「あの理事長を怒らせたらどうなるか、あなたが一番よく分かってるはずよ！？」
それを言われた誠吾は昔の自分のある失敗を思い出してグゥッと言葉に詰まった。

――　それは今から二年前、誠吾がこのカノンに赴任してきたばかりの頃、誠吾をはじめとする、その年赴任してきた教職員を迎える歓迎会が行われた席でのことだ。
元々陽気な誠吾は酒を飲むとさらにその性格に拍車がかかる。
その歓迎会の席で泥酔し、酔いに任せてある失態を演じてしまった誠吾は、次の日、黒岩から理事長室に呼び出されてその場で厳重戒告処分を受けたことがあるのだ。

「あ、あの時は先生にも本当にご迷惑をおかけしました……」
緑はフイッと顔を背けるとそのまま扉の方に体を向ける。
「とにかく、矢貫先生はもう少しその猪突猛進な性格を直して自重なさることね。じゃあ私はこれで」
緑が屋上から立ち去ろうとしたので、誠吾は慌ててまだ火をつけたばかりの長い煙草を手にしていた携帯灰皿に押し込むと緑の肩を掴んだ。
「柳川先生！」
肩を掴まれた緑は迷惑そうに振り返った。
「まだ何か？」
「せ、先生、あの、その、今日良かったら一緒に食事でも……」
「結構です！」
肩に置かれた浅黒い手を緑は強く払った。手を払われた誠吾の顔つきが急に変わる。
「キャッ　！？　」
誠吾に両手首を掴まれ、屋上扉の横の壁に強引に体を押し付けられた緑は叫んだ。
「なっ何をなさるんですか、矢貫先生！？」

誠吾は緑の顔のすぐ前にまで自分の顔を近づけた。ヘビースモーカーの誠吾の体に染み付いた煙草の香りが漂う。

「……あの生徒達に何かするつもりですか……？」

誠吾の押し殺した声に緑の背筋にゾクッとしたものが走る。

「あ、あの生徒って……？」

「俺のクラスの倉沢桃乃と、先生のクラスの西脇冬馬のことですよ」

緑はハッと息を呑んだ。

「な、なぜ先生がその子達の事を知っているの！？」

「俺、先生が正門チェックの週は早く来てるんです。先生は知らなかったでしょうけど」

そう言いながら誠吾は握り締めている両手に更に力を入れる。

「やっやめて下さいっ矢貫先生！」

「……さっきも会議で先生言ってましたよね？　“　生徒達を引き続き指導していく　”　って。また生徒の仲をぶっ壊すようなことをするつもりなんですか！？」

「わ、私は別に壊そうとなんてしてません！」

「柳川先生、他の教師の奴らが先生になんてアダ名をつけているか知ってますか！？　“　破壊魔　”　って呼んでるんですよ！？」

緑の目が驚きで一瞬大きく見開かれる。

「そんな馬鹿げた名前をつけられてるんですよ！　大体、先生はその気もないのにわざと男子生徒に親しく声をかけたり、厳しく指導をしたりとか、生徒達の仲をわざわざ壊しにいくような真似はもう

止めて下さい！　確かにここは規則で異性間交流は事細かに決められてますがお互いの校舎に入るな、とか男女が校内で顔を合わせるのは休み時間はダメで昼ならいい、とかそんなたわいもないもんでしょ？　柳川先生の指導はやり過ぎだし、何より間違ってます！」
大声で誠吾にはっきりとそう指摘され、手首を掴まれた状態の緑は黙って俯く。
「だからもうお願いですから止めて下さい……。俺、先生見ているとなんだか危なっかしくって……」
「あっ危なっかしいのはあなたのほうでしょっ！」
キッと顔を上げ、負けじと緑も大声を出した。
「さっきだって私が助けを入れなきゃどうなってたかしら！？」
「そ、それは感謝してます」
誠吾は素直に礼を言った。
「じゃもういいでしょ　！？　矢貫先生の仰りたいことは分かりましたからこの手を離して下さい！」
しかし誠吾は緑の顔を黙って見下ろしたままで、まだその手を離そうとしなかった。
「離して下さい！」
と緑がもう一度そう叫んだ次の瞬間、緑の唇を誠吾は乱暴に奪った。

「ッ！？　ンっ……！」

緑は必死に抵抗したが両手首をガッシリと抑えこまれていて身動きが取れない。
息苦しさで小さく開いた緑の唇にすかさず誠吾の舌が差し込まれた。
「んんっ……！」
口中にニコチンの苦い味が一気に流れ込んでくる。
たじろく緑の一瞬のスキをついて、誠吾は緑の舌に素早く自分の

舌を絡ませた。
その舌を自在に動かして、誠吾は緑の口中を器用に舐り続ける。
「んっ……んっんっ……」
ねっとりと絡み付くような誠吾のディープキスに緑の体の中心は痺れた。
緑の舌を散々舐った後、ようやく誠吾は口を離した。
そしてハァハァと息を切らしながら二人は互いの顔を見つめ合う。
「好きです」
誠吾は緑の手首を離さないままで告白した。
「俺、前からずっと先生のこと……」
「止めて――ッ！」
緑は絶叫した。
「あっあなたのことなんか信じられないわ！」
緑はそう叫ぶと掴まれていた両手を強引にふりほどき、逃げ出すように誠吾の側から離れた。
屋上扉が再び開けられる音が響き、誠吾が緑を引きとめようと叫ぶ。
「柳川先生！」
しかし無常にも屋上扉は大きな音と共に閉じられる。
一人残されてしまった誠吾はその扉を見つめ、黙って立ち尽くした。

大きな失意を抱えた誠吾はやがて壁に背を預けて寄りかかると、ずるずるとコンクリートの上に足を投げ出して座り込み、また内ポケットから煙草を一本取り出して火をつけた。
大きく煙を吸い込み、赤から紺色に変わりつつある夜空に向かってため息と共に吐き出す。その時、誠吾は指に挟んでいる煙草の吸い口がほんの少しだけ紅くなっていることに気がついた。
吸い口に残された置き土産を誠吾はしみじみと眺め、やがてそれをそっとまた口に咥える。

その後、屋上から夜空へと立ち昇る一筋の紫煙はしばらくの間途絶えること無く、いつまでも　ゆらゆらとたなびき続けていた。

彼が呼ばなくなった理由　【前編】

桃乃達がカノンへ入学してから二週間半が過ぎた。

そろそろ部活を決めなくっちゃ、と思いながら帰宅した桃乃は自宅の門鍵を外し、玄関前の階段を軽やかに上がる。

同じ部活に入ろうね、と沙羅と決めたのはいいのだが、お互いこれといって絶対やりたい部活があるわけではなく、特に気の多い沙羅が、

「ね、バレーとバスケだったらどっちがいい？」

「やっぱり琴っていうのもいいなぁ！」

「う～ん、でも放送部も捨てがたい……」

などと毎日意見がコロコロ変わるのでまだ決められずにいたのだ。

玄関前の階段を上り切った桃乃は、家の中に入る前にそっと冬馬の家を見る。

（冬馬、またバスケ部に入ったのかな……）

駒平の駅で「もう迎えに来ないで」と冷たく言い放ったあの日以来、冬馬は姿を見せなくなっていた。もし冬馬に会ったらあの時の言葉を取り消して謝りたかったのに、今はまだそのきっかけすら見つけることが出来ていない。

そして冬馬との間がおかしくなった原因の要も、女子校舎内で会った以降、昼食の誘いにまだ現れない。一体あの男の人と冬馬に何があったんだろう、と考えつつ桃乃は家の中に入った。

「桃乃？　お帰りなさい」

「お姉ちゃんお帰り～」
リビングを覗いてみると千鶴と葉月がお茶の真っ最中だった。
焼きたてのスコーンのいい香りがする。
「ただいま」
「紅茶淹れておくから早く着替えてらっしゃい。ダージリンティーとバニラティー、どっちがいい？」
「ダージリンにしようかな」
「はいはい」
桃乃が制服を着替えに二階へ行ってしまうと、美味しそうにスコーンにかぶりついていた葉月がその動きを止める。
「ねぇお母さん、そういえば最近のお姉ちゃんってあんまりお母さんのお菓子食べなくなってない？　あたしの気のせい？」
「桃乃はね、少し甘いもの控えるようにしてるんだって」
「へ～！　お姉ちゃんてばダイエットしてるんだ！」
葉月の瞳が途端にキラキラと輝きだす。
「負けてらんないわ、あたしもする！」
皿に戻したかじりかけのスコーンが、バランスを崩してコロンと横たわる。
「まぁ葉月、あなたまだ小学生なのよ？　今からヘンにダイエットなんかしたら体壊しちゃうんだからね？」
千鶴にたしなめられた葉月は頬を膨らませる。
「イヤ！　絶対するもん！　お母さん、今日の晩御飯はあたしいつもの半分でいい！」
「まぁ困った子ね……」
千鶴はしばらく思案顔をしていたがやがて優しく切り出した。
「葉月、いいこと教えてあげましょうか？　この間麻知ちゃんが言っていたんだけどね、裕人くんの好きな女の子のタイプってただ痩

せているんじゃなくて、部分部分に適度にお肉のある女の子なんですって」
「えぇっ裕人兄ちゃんが！？　それホントッ！？」
勢い込んで尋ねてくる葉月に千鶴は笑った。
「葉月は本当に裕人くんが好きなのね……」
「うん！　だってあたし将来裕人兄ちゃんのお嫁さんになるから！」

「フフッ、そうなるといいわね」
「なるもん！　まかせてといてお母さん！」
下の娘の無邪気な言葉に微笑みながらも、千鶴はふと思った。

（葉月と裕人くんはまぁありえないだろうけど、桃乃と冬馬くんてどうなのかしら……？）

もしそうなったら西脇家が親戚になるということだ。
向かいの麻知ちゃんとはとても仲がいいし、そうなったらいいのにな、と千鶴は思ったがふと自分の発想の豊かさにクスッと一人で笑う。

（いくらなんでも気が早過ぎるわね）

「お母さん？　どうしたの急に思い出し笑いなんかして？　なになに？」
「内緒！」
千鶴はそう答えるとティーサーバーに手を伸ばした。
いいタイミングで着替えた桃乃がリビングに下りてくる。
すぐに熱いダージリンが注がれたティーカップが差し出された。
「はい、桃乃」
「ありがとうお母さん」

「ねぇねぇお姉ちゃんはスコーン食べないんでしょ？」
葉月の探るような言葉に桃乃はあっさりと答える。
「食べるわよ？」
「えっ食べるの！？」
「何よ、食べちゃダメなの？」
「そういうわけじゃないけどさ、お姉ちゃんダイエットしてるんでしょ？」
「ダイエット？　そこまで真剣にはやってないってば。少し甘いもの控えているだけ。だからこのスコーンも一個だけね」
桃乃はまだホカホカと暖かいスコーンを手に取り、一口分を口に運ぶ。
「お母さん、コレとっても美味しい！」
「ほらね、葉月。確かに食べ過ぎもいけないと思うけど、何事も程々がいいのよ。分かった？」
千鶴にそう言われ、葉月は少し複雑な顔をしながら半分口をつけたスコーンにまた手を伸ばした。
「それに二人がお母さんのお菓子を食べてくれなくなったら寂しいなぁ」
「だ、大丈夫！　食べるよ食べる　！　お母さんのお菓子って本当に美味しいもん！」
慌てた葉月は大きな口でパクッとスコーンを頬張ってみせた。
その様子を見て千鶴が微笑んだ時、外からけたたましい車のクラクションが聞こえてきた。しかしただ強く鳴らすのではなく、何かに呼びかけているようなリズム音に葉月が一番に反応する。
「今の何かの合図っぽくない？」
間もなくインターフォンが鳴った。興奮した声で葉月が叫ぶ。
「ほら！　やっぱりうちだよ！」
葉月のその言葉にいつもはおっとりしている千鶴もつい感化され、

インターフォンに駆け寄った。
「はい、どちら様ですか？　……あらっ、衍人くん？」
訪問者を知った葉月が弾んだ声を出す。
「衍人兄ちゃんなの！？」
「ええ、いるわよ。今行かせるわね」
「あたしでしょ！？　行ってくる！」
椅子から立ち上がった葉月に受話器の送信口を手で押さえながら慌てて千鶴が引き止める。
「あ、ちょっと待って葉月。衍人くんが用事あるのは桃乃なんですって」
「ええ――っ！？　どうしてあたしじゃないの……」
千鶴は心底落ち込む葉月を気にかけながら桃乃を促した。
「ほら桃乃、玄関に出て」
「う、うん」

（衍兄ィが私になんの用事かな？）

桃乃が外に出てみると、玄関前には燦然と黄緑色に輝く車と、それ以上に輝く満面の笑みでその横に立っている衍人がいた。
「やぁ桃乃ちゃん！」
「衍兄ィ、この車どうしたの？」
「買ったんだ～！」
衍人は本当に心から愛しそうな目で車を見る。
「どうどう？　カッコイイでしょ？」
「うん。かっこいいオープンカーだね」
それを聞いた衍人はしたり顔で細くて長い人差し指を横に振った。
「ノンノン、桃乃ちゃんちょっと違うなぁ。オープンカーじゃなくてカブリオレと言ってくれない？」
「車のことなんてよく分かんないもん」

「ま、それもそうだ。男の車にかける壮大なロマンは女性には分からないもんだからなぁ」
　衍人はそう言うと優雅な身のこなしで助手席のドアをスマートに開ける。

「さぁどうぞお嬢様」

「な、何？」
「素敵な王子がこのグリーンの馬車でやって参りましたのでどうかしばしお付合い下さい」
「え～衍兄ィの運転で？　怖い……」
　おどけていた衍人は途端にガッカリした顔になる。
「おいおい、そりゃないだろ桃乃ちゃん！　俺、免許取ってもう丸二年経ってるんだぜ？　いつもオヤジの車運転してたんだから大丈夫だって！」
「でも……」
　渋る桃乃に、衍人は片手を顔の前に出して必死に拝む。
「ね、お願い！　ちょっとこの辺一周するだけだからさ！　この車今日納車されたばっかりなんだよ。この間から車が来たら冬馬が乗せろ乗せろってうるさくってさ。納車後の最初の同乗者が男なんて冗談じゃないって。縁起悪いどころじゃないよ。事故ったらどうすんだって。桃乃ちゃんもそう思うだろ？」

　桃乃は大真面目に語る衍人を見て吹き出した。

「ヘンな衍兄ィ～！　そんなことぐらいで事故るわけないでしょ？」
「いやいや、俺って結構そういうの信じてるんだよ。だからほら、一種のゲンかつぎみたいなもん？　俺のこの車で一番最初に助手席に座るのはやっぱり可愛い女の子じゃないとね」

「じゃあ別に私じゃなくてもいいじゃない。衒兄ィには女の人がいっぱいいるんだから」
「あの桃乃ちゃん？　その言い方、お兄さんは地味に傷つくんですけど」
「だって事実じゃない」
「そりゃあ女友達は沢山いるけどさ、実は今本命がいないんだよね……」

衒人はキーを指にかけてため息をついた。

「狙ってる女の子はいるんだけど落とすにはもうちょい時間かかりそうだしさ、冬馬は今夜帰って来たら乗せろ乗せろって騒ぐだろうし……。だから桃乃ちゃん、ここはひとつ俺を助けると思って！ね？　ね？　お願いします！」
根負けした桃乃は仕方なさそうに笑った。
「……衒兄ィ、安全運転してよ？」
「もちろんですよ！」
衒人が再び助手席のドアを大きく開ける。
「さぁどうぞどうぞ」

階段を下りて車に乗り込もうとすると、リビングのガラス窓が物凄い速さで開いた。

「お姉ちゃんズルイ！」
「あれ、葉月ちゃん？」
急に現れた葉月に衒人は少し驚いた表情を見せる。
「もうっ衒人兄ちゃんも衒人兄ちゃんよ！　あたしというものがありながらなんであたしじゃなくてお姉ちゃんを誘うの！？　お姉ちゃんじゃなくてあたしを連れてって！」
「あ～そっか、どうしようかなぁ……」

衍人は困り顔で口に手を当てる。
「実はちょっと桃乃ちゃんに話しもあったんだよね……」
桃乃は驚いて衍人の横顔を見た。
今の今まで「話しがある」だなんて衍人は一言も言わなかったからだ。

「葉月、だってあなたこれから塾へ行く所じゃないの」
窓に近づいてきた千鶴が葉月をたしなめる。
しかし葉月の目がうっすらと涙目になっていることに誰よりもいち早く気付いた衍人は慌てて明るい声で解決案を出した。
「じゃ、じゃあさっ、今週の日曜、葉月ちゃんと二人でドライブするよ！　ね？」
「……ホント？」
「本当本当！　だから葉月ちゃん日曜空けておいてくれる？」
「うん！」
葉月は大きく頷き、向日葵のような笑顔になった。機嫌を直した葉月とは対照的に、千鶴は申し訳なさそうな顔で謝る。
「まぁ葉月の我侭で……いつもごめんなさいね、衍人くん」
「いえ、全然そんなことないですよ！　じゃ、ちょっとだけ桃乃ちゃんお借りしてこの辺をドライブしてきますんで！」
衍人は桃乃がシートに座ったのを確認すると「シートベルト締めてね」と優しく言い、助手席のドアを閉めて颯爽と運転席に乗り込んだ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「どうどう？　桃乃ちゃん、このエンジンの回転音の上品さが分かる？　小回りも思ったより効くしさ、やっぱりヨーロッパ車には日本車にはないエレガントさがあるよね！」

浮かれている裄人はグイグイとアクセルをふかしてエンジンを回し、そのスピードのせいで助手席の桃乃は張り付いたような笑顔で少々うんざりしながら裄人の「愛車講釈話」を聞いていた。

屋根を収納してオープンにしているせいで、頬の横を風がものすごい勢いで撫でてゆく。

町内のあちこちを走りながらこの車がいかに素晴らしい性能を持っているかを熱く熱く裄人は語るのだが、車に興味の無い桃乃にとってそれはまさに馬の耳に念仏みたいなものでまったくもって無意味なことだった。

「でさ、リアウインドーの周辺にシルバーのアクセントを加えてるとこなんかすごくスタイリッシュだろ？　足回りはちょい硬めだけど立ち上がりの加速も思ったよりイケてるしさ、……桃乃ちゃん聞いてる？」

「うん、ちゃんと聞いてるよ」

得意満面の裄人の笑顔につられて桃乃もやっと本当の笑顔が出た。

「裄兄ィ、ホントに嬉しそうだね。なにせ初めて買った自分の車だもんね」

「うん、そうだよ。ほら、ウチのオヤジの車ってもろ『オジサンが乗ってる車です！』って感じの車だろ？　あれで女の子迎えに行くの恥ずかしかったんだけどもうこれからは大丈夫！　堂々と迎えに行けますよ！」

「……裄兄ィ、もしかして女の人を迎えに行くためだけにコレ買ったわけ？」

桃乃の鋭いツッコミにギクリとした裄人は運転席で背筋を伸ばした。

「ま、まさかまさか！　何を言うのさ桃乃ちゃんは！　俺、大学もちょっと遠いとこだろ？　だから通学用ですよ、通学用！」

「ふーん」

それを聞いた桃乃はシラッとした顔で前方に目線を戻す。

「あれれ！？　桃乃ちゃん全然信じてないでしょ？　ヒドイなぁ～」

「ねぇそれより裄兄ィ、この車って結構するんじゃない？　お金ってどうしたの？」

「もちろんオヤジから借りたよ。勤めるようになったら分割で返す約束なんだ」

「おじさん、出してくれなかったんだ？」

「あの堅物オヤジがそんな融通効くようなことしてくれるわけないじゃん！」

それを聞いた桃乃は裄人と冬馬の父親の姿を思い出して「そうね」と相槌を打ち、小さく笑った。

真面目で頑固、太い黒縁の眼鏡をかけた啓一郎はまさに「堅物」という形容詞がピッタリくるような人物だ。

「まぁそれでも利子をつけられなかっただけオートローンとかよりは幾分かマシだってくらいかな」

歩道橋のある大きな十字路に差し掛かると、ウィンカーを点滅させて車は右に曲がる。

「おっさすが！　これだけ大きくカーブしても地面にタイヤがしっ

かりと吸いついている感じがするよ！　桃乃ちゃんは分かる？」
「あのね、それと衒兄ィにもうひとつ聞きたいんだけど」
「なにかな？」
「さっき葉月に言ってたでしょ？　私に話しがあるって。それってなんなの？」
「あー……それね……」

桃乃は次の言葉を待ったが衒人はそのまましばらく何も言わずに車を走らせる。
衒人があまりにも何も言わないので桃乃は急かした。

「ねぇあまり良くない話なの？」
「う…ん、桃乃ちゃんにとっていいのか良くないのか俺にもちょっとまだ分かんないんだよね……」
意味不明で曖昧な衒人の返事に桃乃は顔をしかめた。
「もう、はっきり言ってよ衒兄ィ」
「うんちょっと待って、もうすぐ着くから」

車はいつのまにか急な坂道をグルグルと回りながら上っている。
小さな山なので車はすぐに頂上付近にまで着いた。

「やった、空いてる空いてる」
衒人は頂上付近の車道横にある二台しか停めることのできない小さなスペースに車を滑り込ませ、ギアをパーキングに入れた。
「ほら、見てごらん桃乃ちゃん」
桃乃はフロントガラス越しに見えるその光景に思わず声を上げた。
「ね？　ここ、ちょっと高さはイマイチだけどすごく見晴らしがいい穴場ポイントなんだよ。夜に来ると街のネオンが光ってもっと綺麗なんだよ」

「じゃあきっとここが衍兄ィが女の人を落とす場所の一つなのね？」
「大当たり！」
衍人はそうおどけた後、ふと助手席の薄着の桃乃を見て心配気な顔になった。
「桃乃ちゃん寒くない？　俺、いきなり連れだしちゃったもんね。幌閉めようか？」
「え、これ屋根あるの？」
「もちろんですよ！」
と自信満々の口調で衍人はセンターコンソールのスイッチを押した。すると車の後部からメタルトップのルーフが現れ、あっという間に上空を覆いだす。
「スゴーイ　！」
感動している桃乃の反応が嬉しかったのか、衍人は得意げな顔になる。
２０秒足らずでルーフは完全に閉じられ、車内は開放空間から密閉空間へと一気に早代わりした。
「さて、これで密室になったことだし」
衍人はそこで一旦言葉を切るとシートのバックレストを少し後ろに倒し、小さく微笑みながら桃乃を見つめた。
「じゃあその話しでもしてみましょうか？」

彼が呼ばなくなった理由　【後編】

「ねぇ桃乃ちゃん、そんなに緊張しなくてもいいよ？　なにもここで取って食いやしないからさ」

一体何を言われるのだろうと助手席で身を固くする桃乃に、裕人が笑みを浮かべながら優しく言う。そんな裕人らしいジョークに桃乃はクスッと笑うと即座に切り返した。

「うぅん、裕兄ィなら分かんないよ！」

「おっそうきましたか！　ハハッ、参った参った！　今ので桃乃ちゃんが普段俺をどんな目で見てるかよ～く分かったよ！」

一本取られたな、と言いつつ裕人は声をあげて笑った。そしてその笑いが収まると次は考え込むような表情に変わる。

「ん～、でもそうだなぁ……、確かに桃乃ちゃんはとっても可愛い女の子だけどさ、俺にとってはあくまでも“　可愛い妹　”　って感じなんだよね。そう、葉月ちゃんと一緒でさ」

裕人はそこで一旦シートから身を起こすと、車内に流れていた音楽を消す。

「それに弟が好きな女の子取れないしね」

「エ……ッ？」

サラリと言った裕人の言葉に桃乃の胸は一瞬ドキッとした。

「桃乃ちゃんさ、本当はとっくに気付いてるんだろ？　冬馬が桃乃ちゃんのこと大好きなことさ。分かるよな、あれだけしょっちゅう冬馬の奴が分かりやすいことしてればなぁ。ねぇ？」

衍人はダッシュボードの上にあった外国産の煙草を手に取り一本口に咥えたが、桃乃の方を見て「吸わないほうがいい？」と尋ねる。
桃乃がコクリと頷いたので衍人は涼やかなその水色の箱を元の場所に戻した。
「ね、桃乃ちゃんはさ、冬馬のことどう思ってるの？」
しかし桃乃は正面を向いたまま何も答えない。
「もしかして嫌い？　もし冬馬のこと本当は嫌がってて困ってるなら、俺があいつにちゃんと言い聞かせるけど……？」
桃乃は眼差しを伏せ、正面を見たままでポツリと呟く。
「……冬馬は私のこと、本当に、す、好きなの……？」
「何言ってんの。もう好きも好き、超大好きでさ、桃乃ちゃんしか見えてない状態じゃん？」
「だって、冬馬は私のことを桃太郎って呼んでバカにしてるみたいなんだもん……」

「あぁそれね……」

衍人は小さく笑うと前髪を掻き上げた。
「俺知ってるよ？　なんであいつが桃乃ちゃんのこと、そうやって呼ぶようになったのか。これはたぶん俺しか知らないだろうなぁ」
「えっ本当！？　ねぇ教えて衍兄ィ！」
「うん、もちろん教えちゃうよ。でも俺から聞いたことは冬馬には内緒ね？　……えっと、確か一昨年だよね、ウチと桃乃ちゃん家でさ、霧里高原（きりさとこうげん）にキャンプに行ったの覚えてる？」
「う、うん」
「冬馬と桃乃ちゃんがあの時中二で葉月ちゃんが確か九歳、俺が大学入った年だったな。実のところ俺さ、本当はあのキャンプ行きたくなかったんだ。冬馬はいいけど俺もう十八だったしさ、今さら家族で仲良くキャンプなんてやってられないじゃん？」
衍人は相槌を求めるように言った。

「だから最初は行かないつもりだったんだ。でも途中で気が変わってね。俺その当時思ったんだよ。たぶんこれが家族最後のレジャーになるんだろうなってさ。冬馬だってそのうち親とレジャーや旅行になんて行きたがらなくなるだろうな、ってね」
衍人が運転席に深く座り直した時、いつも好んで使っているフレグランスの香りがフワッと車中に広がる。
「だからここは俺が少々我慢して、西脇家最後の家族全員の思い出を作っとくべきかな、って思ったわけ。そんで結局俺も一緒に行ったわけですよ」
衍人は「ちょっとは殊勝なとこあるだろ？」と言うと桃乃の方を見て笑う。
「で、あの高原にある川原でテント張ったじゃん？　俺達は釣り始めてさ。桃乃ちゃんと葉月ちゃんは浅瀬の方で泳ぐ、ってことになって。ね、この先覚えてる？」
衍人は小さな微笑みの中に悪戯っぽい表情を混ぜながらそう尋ねる。
「お……覚えてるわよ！　衍兄ィと冬馬が……！」
桃乃は真っ赤になりながら衍人を思いきり睨んだ。
「そうなんだよね、俺ら見ちゃったんだよね桃乃ちゃんのハダカ」
「裸じゃないでしょっ！？」
完熟トマトのような顔色で桃乃は叫んだ。
「あ、失礼失礼。厳密に言えば下着姿だったね。可愛いかったな～、確か白のフリルついたブラだったよね？　真ん中にちっちゃいリボンついててさ」
「衍兄ィッ！」

桃乃の剣幕に裄人は運転席で身を竦めた。
「だ、だってあの時桃乃ちゃんいつまで経ってもテントから出てこないからさぁ、どうしたのかなと思って冬馬と覗いてみたんだよね。そしたら桃乃ちゃんちょうど着替えてたんだもん」
「だからって普通覗く！？」
「ごめん、ごめん。まぁでもあの時、もう十八だった俺は中二の女の子の下着姿なんか見ても別になんとも思わなかったんだけどさ、あの冬馬くんはちょっと違ったわけですよ」

当時のその光景を再び思い出した裄人は、こみ上げてくる笑いを堪えながら続きを話す。

「あの後の冬馬の様子、ずっとおかしかったんだぜ？　もう“心ここにあらず”って感じでボーッとしちゃってさ。釣竿に魚がかかってもあいつ全然気付かないんだ。傍で見ていてもあれはマジで面白かったよ。でね、俺思うんだ。たぶんあの時から冬馬は桃乃ちゃんを、幼馴染の女の子から一人の女性として初めて意識しはじめたんじゃないかなぁ、って」

“一人の女性として意識しはじめた”という裄人の言葉を聞いて、桃乃の頬は一気に赤くなり、同時に胸の中心を突かれたような衝撃を受ける。

「そ、そんなこと無いと思う……」
「いいや、間違いないって。ね、桃乃ちゃん、思い出してごらんよ。あいつ、あのキャンプの時までは桃乃ちゃんのことを普通に“桃乃”って呼んでいただろ？　でも俺の知る限りではあれ以降なんだ、桃乃ちゃんのこと一切名前で呼ばなくなったの」

衍人に言われて桃乃は必死に自分の記憶を手繰ってみた。
思い返してみるとそのキャンプの前までは冬馬は自分のことを普通に「桃乃」と呼んでいたような気がする。そして「桃太郎」と呼ばれ出した記憶は確かにすべてそのキャンプの後だった。

「だから冬馬は桃乃ちゃんのことバカにしてそんな風に呼んでるわけじゃないと思うよ。たぶん、あいつの一種の照れ隠しなんだとは思うんだけどね。あいつは不器用だからなぁ。要領が悪いっていうか、そういうところ全然俺に似てないんだよね。可哀想に、ウチの堅物オヤジそっくりだよ」
車中からウィンドーの外を眺めていた衍人は、山道の草むらに乗り捨てられている汚れた自転車に目を留める。
「あ、そうそう、それともう一つこっそり教えて上げられることがあるな。あいつ、クロスバイクも買っただろ？　あのリアキャリア、……あ、後ろの荷台のことね、あれ、きっと桃乃ちゃんを乗せるためだけにつけたんだと思うよ。俺、あれ買いに行く時に一緒に行ってやったんだけどさ、サイクルショップの店員達に“　せっかくの綺麗なフォルムが損なわれるから止めたほうがいい”　って何度言われてもあいつ、必要だからって言い張って頑として譲らなかったんだ」

「……！」

あの自転車にまつわる隠された事実を聞いた桃乃は、黙ったまま膝の上に置いてある自分の手をギュッと握りしめる。
「しかもあの車体の色ってオレンジだろ？　オレンジは桃乃ちゃんが昔から大好きな色だもんなぁ」
ついにこらえきれなくなり、桃乃は顔を上げ、勢い込んで衍人に訊ねた。
「ねぇ衍兄ィ、本当にそうなの！？　本当に私のために冬馬はオレ

ンジ色の自転車を選んだり、荷台をつけたりしたの！？」
「うん、そうだと思うよ。それしか考えられないじゃん。リアキャリアなんか特にさ。普通はあんなのわざわざつける必要ないからね」
「……」
それを聞いて再び俯く桃乃の反応を見た裕人がさりげなく次の秘密情報を流す。
「冬馬の奴さ、本当は別の高校に推薦の話しもあったんだ。だけど桃乃ちゃんがカノンを目指しているのを知ってあいつ、カノンを受けることにしたんだよ。知ってた？」
「ホ、ホント……！？」
「本当本当。まぁあいつも健気っていえば健気だけどさ、問題は桃乃ちゃんにその気持ちが全然伝わってなかったってことだよね。……で、お兄さんの話は以上で終了なのですが、肝心の桃乃ちゃんの気持ちはどうなのかなぁ？　ね、俺にだけコッソリ教えてくれない？」
しかし桃乃はそれには答えずに別のことを口にした。
「……実はこの間冬馬とケンカしたの……」
「あ、そうなの？　あぁ、それでか！　いや実はね、最近冬馬の奴、なんか妙にピリピリして常に考え込んだ顔してんだよね。母さんと俺、密かに心配してたんだ。そっか、桃乃ちゃんとケンカしてたからだったのか。そっかそっか」
“　妙にピリピリしている　”　という冬馬の様子を聞いて桃乃の胸が痛んだ。
「どう？　この裕人お兄さんでよかったら仲直りの橋渡しするけど？」
「うぅん、いい。自分でするから……」
「そっか、桃乃ちゃんがそうしてくれるのならもちろんその方が絶

対いいよ。でも何かあったらすぐ俺に言ってね。俺はいつでも桃乃ちゃんの味方だからさ。……あ、もうこんな時間か」
バックレストを元の定位置に戻し、手馴れた様子でギアを素早くチェンジすると衍人は車をゆっくりと発進させる。
「よし、じゃあそろそろお嬢様を邸宅へお返ししないとね」
自宅に送ってもらうまでの帰り道、再び衍人の一方的な愛車自慢が延々と始まっていたが、もう桃乃の耳には全く届いていなかった。車外を流れる景色を眺めながら桃乃は一人考え続ける。車窓の外はすでに暗くなり始めていて、頭の中で色々と考え事をするのには最適の環境だった。

（冬馬がそんなに私のことを好きだったなんて……）

衍人の声をＢＧＭに、冬馬のことだけに意識を集中して考えてみる。
こうして思い返してみると確かに今までの冬馬の行動はすべて衍人の言う通り、色々と自分を気にかけていてくれた為の行動だったのかもしれない、と今は素直に思えるようになっていた。

過去の冬馬との会話や、冬馬が今まで自分にしてくれた様々な事。それら一つ一つを思い出す度に、その思いは揺るがない確信へと変わっていく。ただ、二年前から「桃太郎」と呼ばれるようになったことが嫌でたまらないあまりに、自分自身がその事実に気がついていなかっただけだったのだ。
例え変なアダ名で自分のことを呼んでいても、いつも、どんな時でも、ずっと冬馬は自分に優しかったことに今更ながら桃乃はやっと気付いた。

（私……、今度冬馬と会ったら一体どんな顔をすればいいのかな……）

冬馬と二人できちんと話しがしたい、桃乃は外の景色を眺めながらそんなことをいつまでもグルグルと考えていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

時刻はもうすぐ夜の十一時になる。

倉沢家に桃乃を送り届けた後、すぐさま携帯で親しい女友達の一人を呼び出して二度目のドライブと洒落こんでいた衍人は上機嫌だった。

軽やかにハミングをしながら車のキーを目線の高さにまで持ち上げて足取り軽く二階へと昇る。

（そうだ　冬馬に桃乃ちゃんを車に乗せたことを話しておいたほうがいいな）

後でバレておかしな誤解をされるよりも正直に言っておいたほうがいい、と判断した衍人は自分の部屋に入る前に冬馬の部屋をノックした。

「冬馬く～ん、ちょっといいかい？」

返事は無かった。

しかし部屋の中からは確かに人がいる気配がする。

衍人はそっと冬馬の部屋のドアを開けてみた。そして中にいた弟の姿を見て思わず叫ぶ。

「冬馬！？　　お前何やってんだよ！？」

机に向かっていた為、ドアに背を向けていた冬馬は衍人の大声でようやく振り返った。

「なんだ兄貴か」

まだ制服姿の冬馬はそう言うと再び前を向いてしまった。

ヘッドフォンをかけて音楽を聴いていたせいで衍人のノックがよく聞こえなかったらしい。

衍人は慌てて室内に入ると部屋のドアを急いで閉める。

「おいっ何やってんだよ！　もしオヤジに見つかったらどうなるか分かってんのか！？」

「……ほっといてくれよ」

冬馬は椅子に座って腕組みをしたままイライラしたように衍人の方を見る。

「だってお前……あっ、それもしかしたら俺のじゃないか！？」

「前から思ってたけど兄貴のこれ、旨くねぇよなぁ。それにキツすぎ」

冬馬は衍人の部屋から勝手に持ってきた煙草を口に咥えたままフゥッと紫煙を吐く。

「それよりお前早くそれ消せって！　オヤジに見つかったらヤバイっての！」
「兄貴だって高校の時にはもう吸ってたじゃん」
「俺は高校の時は隠れて吸ってたよ！　部屋で堂々となんか吸ってなかったぞ！？」
「いいからほっといてくれって」
「お前この頃なんかイライラしてるよな……」
「だから吸ってるんだろ。吸うと少しは落ち着くんだ」

衍人は冬馬のあまりの不機嫌な様子に困惑しきっていた。
そして今日桃乃に冬馬の気持ちを勝手に伝えたことを今言っても大丈夫だろうかと一人悩み始める。

「……兄貴、考え事してるから一人にしてくんない？」

冬馬はヘッドフォンのボリュームを上げた。
ヘッドフォンから激しいロックの音が微かに漏れ聞こえてくる。
今はやはり話すべき状況ではない、と判断した衍人は、冬馬の要求通り部屋を出ていくことにした。
「冬馬、今日はそれでもう止めておけよ。スポーツマンが煙草なんか吸ってどうすんだ。それともう俺の部屋から煙草勝手に持っていくなよ。な？　分かったな？」
冬馬からの返事は無かった。
その様子を見た衍人は小さく息を吐く。

（今日の桃乃ちゃんとのドライブの話しをしたら何されるか分かんないな……）

ピリピリとした空気の中で制服姿のまま煙草をくゆらす冬馬の背中を見ながら、裕人は廊下に出ると静かにドアを閉めた。
背後でドアがそっと閉められる音がすると冬馬はまた大きく煙草の煙を吐き出す。

冬馬が煙草を吸い始めたのは半年ほど前の頃で最初はただの好奇心からだった。
裕人が好んで吸っているこの外国産煙草はかなり癖があり、最初のうちは紫煙をろくに肺に入れることも出来なかったが、度々裕人の部屋から一本、二本と煙草を勝手に取ってきてふかすうちにある程度は慣れてきていた。やがて煙草を吸うと妙に気持ちが落ち着くことに気がつき、今ではイライラした時にはこうやって煙草をふかすようになっていたのだ。
しかしここ最近、煙草を吸っても少しも気持ちが落ち着かないことに冬馬自身、とっくに気がついていた。そしてその理由も。

（七海中か……）

ヘッドフォンからは脳髄に響き渡るくらいの大音量でハードロックのサウンドがガンガンと鳴り響いている。白杜中学時代、何度か訪れたことのあるその中学を冬馬は必死で思い出していた。

「白杜のバスケ部がこっちに来て試合してた時、よくお前の試合見に行ってたんだ」

初めて教室で顔を合わせた時、要は確かにそう言っていた。
今はかなり薄れてしまっている自分の記憶から七海中で顔を知っている人間を冬馬は思いつく限り思い出してみる。
しかしいくら記憶の底をさらってみても七海中のバスケ部のレギュラーメンバーと自分と同学年のメンバー、そしてマネージャーく

らいしか思い出せなかった。
あとは最初に七海中に対抗試合に行った時に挨拶をしにきた生徒会長くらいだ。
その記憶の断片の中にはどう考えても要と会った記憶が無かった。

気がつくと煙草は咥えているすぐ側の部分まで灰になっている。
冬馬はフゥ、と最後の煙を吐き出すと傍らにあった空のコーヒー缶に吸殻を突っ込む。
そのまましばらく冬馬は考え事を続けていたがやがてヘッドフォンを外すと窓際に寄り、向かいの倉沢家の二階を眺めた。そして桃乃の部屋に灯りが点いているのを見た時、心臓の中心がぎゅっと縮まったような軽い痛みを覚える。それはあの日の朝、電車に乗って去っていた桃乃を再びカノンの通学路で見つけた時と同じ痛みだった。

あの時もう一度声をかけようとしたのを直前で止めたのは、振り向かない華奢な背中に気後れしてしまったからだ。
ペダルをひと漕ぎする度、桃乃との距離が近づく。その度に胸の痛みが増していき、結局は桃乃を避けるようにクロスバイクで追い越してしまった。声をかけずに桃乃を置き去りにしてきたあの日以来、今までのように気軽に桃乃の側に行く勇気を無くしてしまっている自分に、冬馬は焦りを感じ出していた。

（これからどうすりゃいいんだよ……）

乱暴に制服を脱ぎ捨てると桃乃の部屋の灯りから視線を逸らし、カーテンを荒々しく後ろ手で閉める。そして珍しく何も予習をせずにシャワーだけを浴び、ベッドに横たわると疲れきった顔でそのまま浅い眠りへと入っていった。

そしてあの娘はボイル海老になった

その日は朝からかなり気温が上がっていた。
職員室でバサバサと団扇を扇ぎながら、珍しく難しい顔で考え込んでいる様子の誠吾がいる。
今日で新学期が始まって三回目の金曜日。そして定例会議の日だ。
自分の担当クラスの笹目梨絵のことを今日の会議であの黒岩理事長に報告しなければならない。
梨絵になぜ体育をずっと見学しているのかをまだ聞き出していない誠吾は焦っていた。

（今日　笹目が出てくれれば問題ないんだがなぁ……）

そんな一縷の望みを胸に、誠吾は次の女子一年一組と二組の合同授業に向かう。グラウンドに着くともう女生徒達は全員集まっており、けらけらと楽しそうに騒いでいた。

「皆揃ってるかー！　じゃあ整列！」

誠吾の掛け声で女生徒達はお喋りを止め、きちんとクラス毎に三列に並ぶ。
「さぁ今日は走り高飛びをやるぞー！　お前達のピチピチパワーをこれでもかっていうぐらい目一杯見せてくれよー！」
途端に女生徒達がドッと爆笑する。
「やだー！　先生なんかエローい！」
“　ピチピチパワー　”　だって！　死語よ死語！」
「それにさー、矢貫先生が言うとエッチっぽく聞こえない？」

女生徒達に一斉にからかわれて誠吾は頭を掻いた。
「俺が言うとそんなにやらしくなるか？」
「なるなるー！」
「セクハラ一歩手前って感じー？」
「あーそれ言える言える！　なんか妙にオジサン臭いのよね、先生はさ。まだ二十六歳なのにー！」

生徒達は口々に誠吾をからかうがその言葉には悪意はまったく感じられない。
好き勝手に色んなことを言っても、気さくなこの体育教師を慕っているのだ。

「お前らから見りゃ、どうせ俺はオジサンだよ！　じゃあ出席を取るぞ！　一組！　相田！　安西！　飯島！」
女生徒達全員の顔を見渡し、その中に梨絵の姿があることを確認した誠吾は出席を取り始めた。
「よし全員いるな。じゃあさっき俺がバーを用意しといたからそっちに移動するぞ！　駆け足！」
誠吾は首にかけている愛用の青いホイッスルを口に咥え、一定のリズムで軽快に鳴らしながら先頭に立って走り出した。
バーのある場所へ到着すると全員を体育座りさせ、本日の予定を説明する。
「いいか、今日はまず最初に背面飛びから始めるぞ。できればベリーロールまで行くのが今日の目標だ。じゃ早速一組から飛んでもらおうか」
「先生！　その前に先生がまずお手本見せてくれなくっちゃ！」
「そうよそうよ！」
女生徒達から茶々が入り、梨絵のことで頭が一杯だった誠吾は一人慌てる。
「お、おう、そうだったな。よし、じゃあ見本を見せるか。全員瞬

きしないで見ておけよ！」

誠吾は一メートルほどの高さだったバーを一気に押し上げた。

「えーっ先生そんなに高くして大丈夫　？」

「いいから見とけって！　じゃ背面で飛ぶぞ！」

そう叫ぶと誠吾はバーから充分な距離を取った。

「せんせー頑張ってー！」

女生徒の応援を背に、最初はゆっくり、そしてバーが近づくにつれドンドンとそのスピードを上げて、タン、という軽やかな音と共に誠吾はバーに向かって飛んだ。

首にかけていたホイッスルが同時にフワリと空中に舞う。その背中はバーの上を難なく超えた。

「先生スゴーイ！」

「やったぁ！」

その華麗なジャンプを見た女生徒達から大きな歓声が上がる。

マットの上から立ち上がると誠吾は女生徒達を促した。

「ま、ざっとこんなもんだ。じゃあ早速順番に飛んでみろ。踏み切る時は力強く、バーの上に落ちないように気をつけてな」

誠吾の指示で女生徒達はバーを元通りに低く下げ、順番にバーに向かって飛び始めた。誠吾はしばらくその様子を見ていたが、やがてそっとその場から離れると少し離れた木陰に座っている梨絵に近寄り、その場にしゃがむ。

「笹目……今日も見学か？」

梨絵は誠吾の顔を見た。

おとなしそうな顔をしているが芯の強そうな瞳の梨絵は、小さな声だがはっきりと答える。

「はい」

「なぁ笹目。お前一度も体育に参加してないだろ？　どうしてなんだ？」
「生理でお腹が痛いんです」
その返事を聞いた誠吾は一瞬唸り、困ったような顔をする。
「でもお前、もう三週間も経つのにずっと見学の理由はそれだろ？
俺、男だけどさ、さすがにそれはおかしいと思うぜ？」
「私、生理不順なんです」

「……ん～……」

梨絵の返事に誠吾は先ほどよりも長く唸った。
「笹目、それが本当なら病院に行ったほうがいいんじゃないのか？」

梨絵は誠吾の顔をじっと見つめる。
「先生、嘘だと思ってるんでしょ？」
「そ、そこまで言ってないけどさ……」
慌てた様子で馬鹿正直に答える誠吾を見て、固い表情だった梨絵の顔がほんの少しだけ緩んだ。
「……先生、私、妊娠してるんです」
「な、なにぃっ！？」
「嘘です」
「おっお前、教師をからかうなっ」
一瞬本気で驚いた誠吾は梨絵を叱った。
「すみません、先生」
梨絵は再び固い表情に戻るとペコッと頭を下げた。
走り高飛びをしている方角からはキャーキャーと楽しそうな声が聞こえてくる。
誠吾は再び説得を始めた。
「なぁ笹目、今日の体育に出てくれないか？」
「……」

「実はさ、もし今週も笹目が体育に出なかったら来週お前は学審会にかけられることになってるんだ」
梨絵は少し驚いた表情を見せた。肩上で切り揃えられた髪が小さく揺れる。
「学審会って『学生審問会議』のことですか？」
「あぁそうだ。指導で態度を改めない生徒に限って処罰をする、なんて建前はあるけどな、結局あの審問会に呼び出された生徒は最低でもかならず停学は食らっちまう。お前をそういう目に遭わせたくないんだよ」

それを聞いた梨絵はなぜか挑戦的な目で誠吾を見た。

「先生、なんだかんだ言って結局は私のためじゃなくて先生の保身のためなんでしょ？　自分の担当クラスから停学者が出るなんて困りますもんね」
「バカ言うな。別に俺はそんなことになっても屁とも思わねぇよ。だけどな、この学園で一度停学処分を食らうとその先は厳しくなるんだぞ？　どんなに筆記テストが出来てもまず間違い無く大学への推薦はして貰えない。それに次にまた何か問題を起こせば停学経験者はすぐにまた学審会への呼び出し、場合によっちゃ退学勧告だ」

誠吾はポンと梨絵の肩に手を置いた。
「なぁ、頼むから今日は出てくれないか。そうすればとりあえずは今日の会議でお前のことをなんとか庇えることができるんだ」
「……」
再び沈黙した梨絵は遠くを見て何かを考えているようだった。
「な？　笹目」
梨絵はそれまで合わせていた誠吾との視線を外し、小さく頷く。
「……分かりました。今日の体育出ます」
「そうか！」

その返事に安堵した誠吾は日焼けした手で梨絵の手を掴み、立たせる。
「よしっ行くぞ！」
梨絵は誠吾の後をついて歩きながら一瞬下腹部に手を当てた。
しかし前を歩いている誠吾はそんな梨絵の様子にまったく気付いていない。
「おーい、ちょっとストップ！　次は笹目が飛ぶから入れてくれな！」
今まで一度も体育に参加していなかった梨絵が来たので、女生徒達は急にザワザワと騒ぎだす。
「ねぇモモ。あの子、体が弱いわけじゃなかったのかなぁ？」
「うんそうだね……」
コッソリ話しかけてきた沙羅に相槌を打ちながら桃乃はこちらに歩いてくる梨絵を見た。気のせいか、太陽の下に出てきた梨絵の顔色はあまり優れないように見える。
「笹目、いいぞー！」
嬉しそうな大声で誠吾が梨絵を促す。
梨絵は一度走り出そうとする素振りを見せたが、急に口を片手で覆い、わずかに俯いた。やがて手を外し上を向いて大きく息を吐くと、一瞬の間を置いてバーに向かって走り出す。
バーの手前で勢い良く踏み切った梨絵の身体は宙に高く浮き、バーの上をかすることなく綺麗に飛びきった。
「よし！　クリアーだ！」
しかしそう嬉しそうに叫んだ誠吾の声に急に緊張感が走る。
「……笹目！？　おいっどうしたっ！？」
「う……うぅ……」

落下したマットの上で体を丸め、ボイルされた海老のような姿で急に苦しみだした梨絵に誠吾が駆け寄った。
「キャーッ！　血っ！？」
一人の女生徒の金切り声がグラウンドに響き渡る。
「さっ笹目ッ！　しっかりしろっ！」
誠吾は梨絵の身体を何度も揺さぶる。
走り高飛び用のくすんだ緑色のマットの上は、倒れている梨絵の下腹部あたりからじわじわと滲み出してきている鮮血で真っ赤に染まり始めていた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

その日の定例会議は定刻通りに始まった。
黒岩の会議開始の挨拶を聞きながら緑は隣の席を見る。しかしその席に着なれないスーツを着て、いつも窮屈そうに座っている誠吾の姿は無い。
「もうご存知の先生方もいらっしゃるかと思いますが、本日、一年女子の体育の授業中に事故が発生したという報告を受けております」
梨絵の事故のことを知らなかった職員達がざわめいたので、黒岩は「お静かに」と威圧感をこめた口調で場を完全に静めた。そして細めの銀縁の眼鏡を一度押し上げ、今日起きた事故の詳細をいつもの沈着冷静な声で職員達に説明し始める。
「本日、走り高飛びの授業中に一人の女生徒が腰から落ちた際激し

い出血を起こし、意識不明になったとのことですぐに救急車を手配致しました。授業を担当されていた矢貫先生はそのまま付き添いで病院に向かいました。先ほど連絡が入りましたのでもうまもなくこちらに戻ってくると思います。矢貫先生には戻り次第、ここで報告していただきます。では一年の先生方から今週の報告をお願い致します」

ゆっくりと黒岩が椅子に着席した際、いつもシンと静まり返る会議室だが今日はさらにその静寂が重く感じられた。

「で、ではまず私から……」

黒岩から一番近い席に座っていた一年物理担当の関澤寛司（せきざわかんじ）が萎縮しながらも立ち上がる。

「え～、私の担当する一年物理は特に授業の遅れもなく、生徒も皆優秀ですので滞り無く進んでおります。中には物理に非常に関心がある生徒もいて、授業が終わった後私の元に来て色々と質問してくる生徒もおり、嬉しく思っております」

「学生が勉学に熱中するということは彼らの本分でもありますからね。素晴らしいことです。関澤先生の教えもいいからでしょう」

黒岩は関澤を誉めた。

「いえいえ、とんでもありません。私の教えなど……」

関澤がそう恐縮した瞬間、第一会議室の扉がガチャリと開いた。

「……遅れて済みませんでした……」

第一会議室に現れた誠吾を黒岩がギロリと睨む。

病院から戻って会議室に直行してきた誠吾はジャージ姿のままだったのだ。

「関澤先生ありがとうございました。では今戻ってきましたので次は矢貫先生に早速報告していただきましょう」

黒岩は関澤に向かって手で座るように合図をした。誠吾の服装については今は不問にすることにしたらしい。
「さぁ矢貫先生」
黒岩に促され、誠吾は会議室に入る。そして空いている席の椅子を引き、そのままそこに立ち尽くした。
その場で沈黙を続ける誠吾のせいで、会議室内の時の流れが止まったままかのように感じる。
緑はそっと横目で誠吾の顔を見上げたが、いつもは日に焼けて血色のいいその顔に今はまったくと言っていいほど血の気が無かった。
「矢貫先生、早く報告を」
黙って突っ立ったままの誠吾に黒岩の叱責が飛ぶ。

「……りゅ、流産しました……」

会議室内で発した誠吾の第一声は少し震えていた。
「笹目梨絵は妊娠していました……。だから体育の授業にも出なかったんです……。そ、それを俺が無理に体育に参加するように言ったから笹目は……。俺が、俺が悪いんです……！」
「矢貫先生、それは矢貫先生のせいではないでしょう。その女生徒が妊娠していたことを先生は知らなかったのですから。授業に生徒達を参加させるのは教師の当然の職務です。それよりも問題はその女生徒が妊娠していたという事実です。矢貫先生、相手は誰か分かったのですか？」
「……笹目が個人的に受けている家庭教師の青年だそうです……」
黒岩の尋問は素早く、そして執拗に続く。

「女生徒のご両親のほうは？」
「……連絡を取ったら病院に駆けつけてきました…。ご両親も今回の妊娠のことはまったく知らなかったようです……」
「女生徒は今どうしていますか？」
「……まだ病院にいます……。検査のために後二、三日入院することになるかもしれません……」
「結構です。分かりました。いずれにせよ、その女生徒の体調が戻り次第、学審会にかけることにいたします」
「……やっぱり笹目を学審会にかけるんですか……？」
「当前のことです。当学園で妊娠したなどという生徒を置いておけると思いますか？　規則にのっとり学審会は行いますが、女生徒には退学していただかなければならないでしょうね」
「そ、そんな！　退学だなんて！」
誠吾は青い顔で叫んだ。
しかし黒岩はいつも通りの冷静な声で答える。
「矢貫先生、当学園はカノン慈愛学園ですよ？　カノンという名の通り、規範に沿った行動を取れない生徒はこの学園には一切必要無いのです」

「……あんたって人は……！」

椅子が大きく後ろに倒れる音がした。
倒れた椅子もそのままに誠吾はズカズカと黒岩の元へと詰め寄ると、右拳で黒岩の机の上を壊れるぐらいの勢いで叩いた。机が割れんばかりのその激しい音に黒岩を除く職員全員がビクッと体を竦める。
「なんで……どうしてそうも規則、規則でしか物事を考えられないんだ！　笹目は今回の流産で身も心も傷ついているんです！　なぜそんな可哀想な生徒をゴミでも捨てるかのように弾き出すんですか！」

「規則は重要ですよ、矢貫先生」
黒岩は今の誠吾の行動にもまったく動じないで再び眼鏡の淵を押し上げる。
「社会とはすなわち規則で成り立っている世界です。そして社会の規則はこの学園の規則よりもずっと煩雑で膨大です。ここでの規則が守られないようでは、社会に出てもまともにやっていけるわけがありません。そうは思いませんか？　矢貫先生」
「理事長ッ！　あんたの言っていることは正しいことかもしれないがそんなのはただの紙の上の絵空事と同じだ！　そんな杓子定規なやり方だけでは解決できない問題だってこの社会には一杯あるでしょう！？　それが分からないんですか！」
「……どうやらこの問題では矢貫先生と話し合ってもいつまでも平行線のようですね」
黒岩は眼鏡の淵ごしに誠吾に冷たい目線を向ける。
「もう結構です。では席におつき下さい。まだ会議は終わってませんので」
黒岩を見下ろす誠吾の両拳が震えていた。その拳を見た緑は咄嗟に立ち上がる。
「矢貫先生！　席について下さい！　次は私が報告いたします！」
しかし誠吾は緑のほうを一瞬チラッと見ただけで席につこうとはしなかった。
「……俺は……これで失礼しますっ！」
黒岩にそう怒鳴るように告げ、誠吾は足取り荒く会議室を出ていってしまった。
会議室のスリ硝子越しに足早に去っていく誠吾のシルエットが凄

いスピードで移動していく。

「矢っ……」

今は会議中だということを忘れ、一瞬でも誠吾の後を追おうとした自分自身に緑は驚く。

会議室内は再び水を打ったように静かになった。

（バカ……こんなことしちゃってどうする気なのよ……）

「では柳川先生、報告をお願い致します」

呆然と立っていた緑の耳に抑揚の無い声で黒岩から報告を急かす言葉が響いてきた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4883x/

トライアングル・スクランブル

2011年10月21日07時08分発行